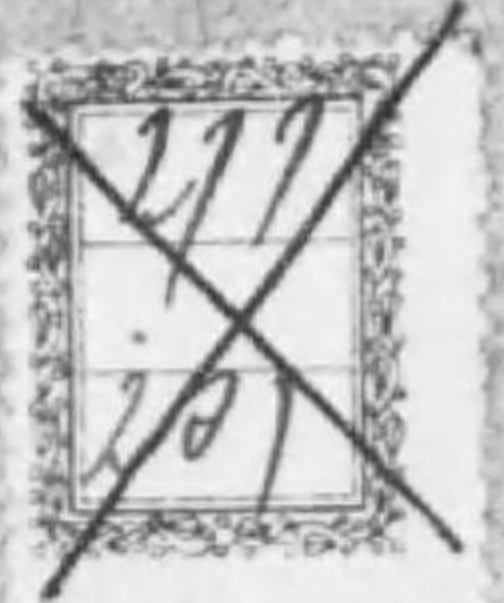


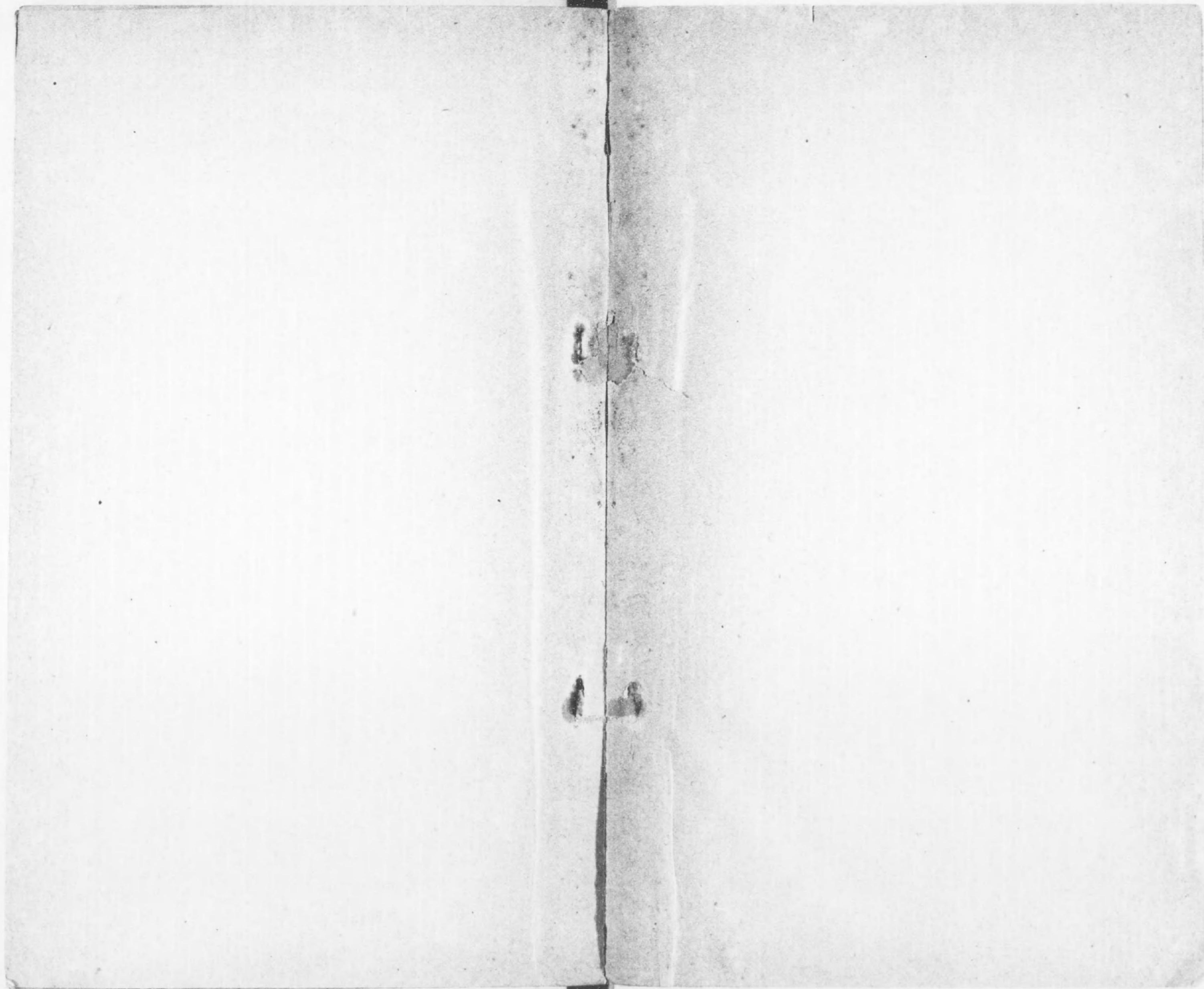
江見水蔭作
八幡白帆書
泣なかぬ女をんな

大阪 樋口隆文館發行



始





持116
490



ぬ

女をんな

八江
幡見
白水
帆蔭
畫作



心
抄

加

■ 次目説小刊新館文隆口樋 ■

同	同	同	同	和	同	同	伊	嶋	同	同	同	羽	同	同	同	同	同	渡
				田			藤	村				様						邊
				天			銀	抱				荷						黙
				華			月	月				香						禪
				作			作	譯				作						作

戀浪二弱靜予怒出其武命電男風七封女怪千
 のま人き の士 流首 人獅の枝
 意くの 善藝
 地ら女人子 濤潮女系 薩妓窟子怪子

の大多てに上紙開新の地各西東は物版出の館文隆口樋
 い白面極至もてん讀なれど付に物るたし傳を評好

心
也
白



■ 次 目 録

同 同 同 同 和 同 同
田 天 華 作

戀 浪 二 弱 靜 予 怒
の ま 人 さ
意 く の
氣 地 ら 女 人 子 濤

の 大 多 て
い 白 面 極 至 り て ん 顔

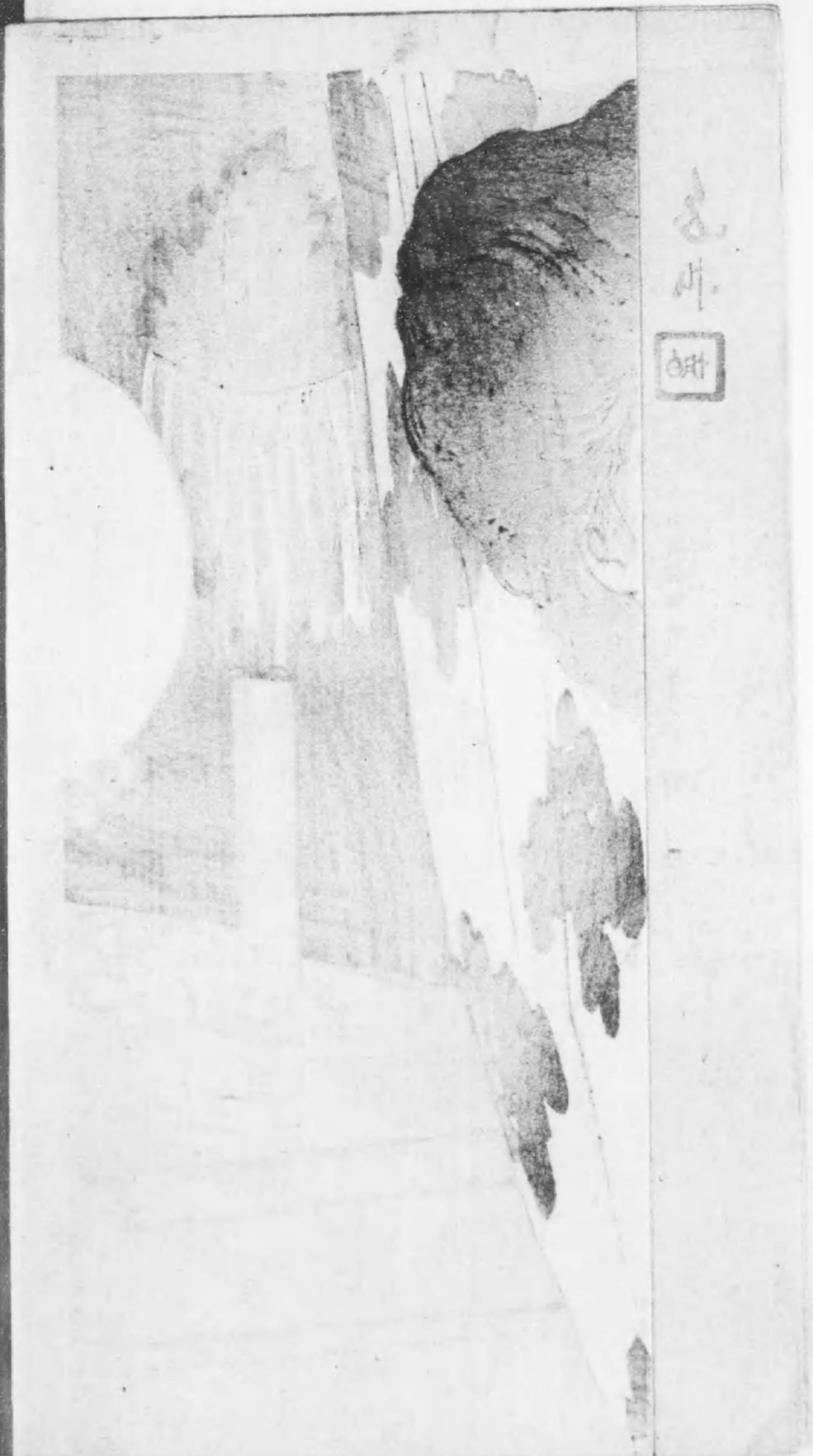
泣かぬ女

江見水蔭

(一)

大層な流行で、女優でなければ夜も日も明けぬといふ此頃、それよりも前に下總の銚子に妙な女優劇團があつて、一時花の東京まで乗込んで興行した事が有つた。見方に依つては之が女優劇の元祖かも知れない。

銚子に近い松岸といふ里に遊廓があつて、其所に名代の開新樓と云ふのがある。此所の主人が却々事業家で、遊女屋の他に引手茶屋も持つて居る。仕出し屋も持つ



と
山
山

て居る。銚子に料理屋も宿屋も出して居る。開新座と云ふ芝居小屋も持つて居る。それで諸方から面の好い少女を大勢年期で傭つて、中には例の養女といふのにしたりして、藝をそれ／＼巖しく仕込んで、平常は藝妓半玉として働かして、時を見れば其に芝居をさして、開新座を打つのは勿論、近郷近在を押廻して、其から年限が来ると改めて娼妓にもする。

これでは儲かる一方である。今に銀行まで手を伸ばすだらうといふ評判。此女優劇の中で一番光つて居るのが坂東登女吉と云ふので、明けて此春十六歳。美しい上に藝が達者で、役は何んでも引受けるが、惜しい事には愁が利かぬ。顔に色氣が有り過ぎるからで、泣く場合には笑つて居る様に見えない。

あれは泣けない女優だ。泣かぬ女だと、それで又評判を取つて、人氣は何處までも登る許り。で有りながら如何いふものか、引幕や立幟が一ツも出来ない。他の女優には澤山出来るので、これが皆棄返して遊女屋や宿屋の夜具に成るのだが、登女

吉には何處からも贈つて来ない。贈つて来ても亦それを受けない。

此初春の興行を開新座で打つて居る其の中日である。前が銚子館と云つて料理と宿屋とを兼業にして、矢張開新座と同一家。

此所の奥座敷へ陣取つた客と云ふのは、高神の綱元で榛澤勘兵衛といふ老爺。海坊主の様な大きな要領を得ない容貌で、それが大漁で懐中を膨らまして、羽二重別業の萬祝を引掛けて乗込んで来てるのだから、鼻息の荒い事は一通りで無い。

藝妓も女中も大抵降参して逃げて居る。一人捕まつて居るのは坂東登女吉。此も潮時を見て帆を上様とお尻の方をモジモジさして居るが、却々以て放さない。

「なア登女吉、俺も去年から今歳の様に大當りが續いては、金の遣ひ様が無くつて困つて居るだア。やア全く魚てえ物は難有えもので、綱さへ張つてれア向ふからイクラでも入つて呉れるで、そんなに儲けなくつても好いのに、自然と儲けさせて呉

れるんだから仕方かねえだよ。如何だい登女吉、俺に纏まつた金を遣はして呉んねえかよ。わ、金をよ」と勘兵衛、大きな巾着網を座敷で擴げ出した。

「いくらでもお遣ひなさいな」と登女吉は素氣なく答へた。

「や、それも一通りの遣ひ方ぢやア面白くねえだ。皆んなお前に注ぎ込みてえだよお前によ」

「妾に……お酒なら口を割つても無理に注ぎ込み様が有るでせうが、お金を妾に注ぎ込むつて、如何するのです」

十六だけれども登女吉は斯うした社會で大きく成つたので、大人の様な臺詞もすらすらと出る。

「やアそんな分つた様な分らねえ様な事を言ひなさんな。俺はお前に縮緬の引幕を贈らうと思つてるだが、登女吉、受けて呉れべえなア」

「えッ引幕？」

「縮緬だぞ」

引幕や立幟を贈られるといふ事は、或る新なる出来事の表象に當るので。此の土地では、あれも到頭誰某に行幕を贈られた。未だ十四だといふのになアと、直評判に爲れるのである。それが未だ十六にしてそれを受けぬ登女吉は、周囲の者からは不具者扱ひにされて居りながら、自分としては密に誇りとして居るのである。

それに此海坊主から引幕！

(11)

縮緬の引幕を貰ふなんて、先づ地方で絶無と云つても好い。此上も無い名譽なのだけれど、それに附随した或事を思ひ浮べると、人もあらうに勘兵衛老爺からは如何したッて受けられるもので無いと、坂東登女吉はツンとして。

「そんな物入りませんよ」と一言にしして斥けた。

海坊主の様な勘兵衛は、ニヤリ／＼笑ひながら。

「然ういふだらうと思つて居たよ。お前は慕なんか入らねえたらうと、初めから俺は知つて居たが。待てよ。此事に就ちやア皆んな承知の上なんだぞ。十六にも成つて自分の引幕が引かれねえてえのは、何んだか變だと世間がそろ／＼噂し出したから、是非此春は往生さしてねど、種々評議して居た處なんだ。其處へ俺も乗込んだのだ。少々無理をしても如何か納得さして下さいてんで、チャンと下では話か出来てるんだ。如何せお前、宗吾様同様、江原臺で磔刑に成るもんなら、俺の手に掛つた方が芝居に成るだア。如何だえ、登女吉、へ、へ、へ、」

勘兵衛の顔には、罇の油が浮いた様にキラ／＼汗が光り出した。

アセチリン燈の瓦斯は室内に籠つて、息が詰る位厭な臭氣がする。

問題は始終氣に成つて居て、それ許りが苦勞で耐えなかつた大事件である。

登女吉はいよ／＼自分の身の上に大革命の來る時と感念せずには居られなかつた。

曾て或る少女の雑誌に、海坊主が大きな口を開いて、小舟に一人乗つて居る姫君を、一息に吸はうとして居る挿畫の有つたのを思ひ出さすには居られぬ。

勘兵衛の禿頭、白髮の少し生え掛つて居るのを五分刈にした處、鬚の剃つた跡のブツ／＼して居る處、鈍栗目玉、獅子ッ鼻、如何したつて海坊主だ。それが自分を一口に吸つて了ふだらうといふ、怪奇的にも考へて、戦慄せずには居られぬ。

だが、既う此様子では悉皆手が廻つて居るのだらうから、豫ての覺悟の通り決行するより他には無いと。

「では、綱元……お言葉に従つて、引幕を拵へて貰ひますわ」と登女吉は言ひ切つた。

「承知したか。やれ其奴は有難え……」と云ひつゝ、突如猪口を乾して登女吉に差し

た。勘兵衛の觸れた物は何んでも魚臭い。別して唇の附いた猪口の端は鮪の香か

する。それを受けるさへ厭なのだもの、此老爺の世話に成れるものでは無い。と思つて

も、そんな顔色は見せられないので。

一頂戴……」と云ひつ、猪口を受けた。

勘兵衛は酌を爲るのに近く膝を寄せて來た。彼が一寸寄つて來れば、此方は一尺も避けたいのだが、最後に取るべき手段の爲には、今の間は如何なる事でも耐忍ばねばならぬと、身を氷らして登女吉は靜とじて居た。

勘兵衛は好い氣に成つて、ぐつと片手で胸を開いて、熊の如き胸毛を示して、今更にぐつと開くと、晒で卷いた腹が出た。其處に紙幣の束が幾個も挟んであるのが見せたいのだ。何んといふ下等な態度だらうと、登女吉は情なく成つた。

「さア此中から、何枚でも引ツ子抜きねえ。なに、今夜の肴に遣るだア。幕の代は別に親方の手へ渡すべえ」と勘兵衛はニヤ／＼して居る。

いくら紙幣が欲しくつても、こんな風で出されたのに、手が着けられるものではない。祝儀なら祝儀の様にしておすが好いと思つたが、併し今夜いよく豫ての覺悟を實行すると我ると、差當てつ必用なのは金である。

引幕の代は別として、今夜の肴といふならば、彼の腹巻の間から、序に彼の度臍まで抜いて驚かして遣りませうと、登女吉は決心して。

「それでは頂きますよ」と言つ、グイと一束。五圓紙幣で二十枚も有るらしい。

抜いて見て登女吉は驚いた。斯うは無からうと思つたのである。

抜かれた勘兵衛も少々驚いたが、目的を達する前の事。大腹を示して。

「それで好えのか。はッはッはッ。慾がねえぞ。此方は十圓紙幣で揃つてるだが。はッはッはッ」

(三)

銚子停車場は終點驛である。線路は上りの一方道、それを傳つて西の方に走る少女一人。それは坂東登女吉だ。
 今は既う午前の二時でもあらう。終列車は勿論の事、貨物列車さへも休止して居る。水の流れも停るといふ制限である。
 だに驛前の銚子館では、つい今の先きまで大浮かれて騒いで居た。此邊は警察が寛大なので、徹夜で三味太鼓を鳴らすのは珍らしく無い。
 いよゝゝ高神の勘兵衛さんから、登女吉が縮緬の引幕を貰ふと極つてから、急に銚子館では景氣附いて來た。

前の芝居がハネてから、女優連は大概此方へ來た。女優即ち藝妓なる特色を充分に發揮して、唄へや、舞へや、後には名物の大漁踊まで出た。
 取巻進中は夜通しでも騒ぎたかつたのだが、勘兵衛が唯いと言ひ出したので、いよゝゝお聞きと決定した。
 當然登女吉が其介抱を引受ける譯で、屏風の中に酒の臭氣の籠つて居るのを、如何しても嗅かねば成らぬ様に迫つた。
 他の者は疲勞と酔とで、皆行倒の人の如く、其方此方に眼つて了つた。
 いよゝゝ大酔の勘兵衛も、猛烈な駈を掻いて睡り掛けた危機一髪の間を、登女吉は密と抜出した。
 多くある客座敷の其一室の戸棚の中に豫て忍ばして置いた布呂敷包、それを引つ抱へて、それからショールだけ首へぐるゝ巻にして、メリンス友禪の長襦袢の儘、雨戸を密と開けて、庭へ出た。

庭から外へは塀を越して出た。舞臺の働きが役に立った。

直ぐ前は停車場である。線路を何處までもと走り出した。

素足に草履を突ッ掛けた。けである。それで枕木を踏んだり、砂利を踏んだり、又軌道を踏む。痛い冷めたいで指の先には威觸が無く成つて了つた。

それに長襦袢一枚の上を、利根川向ふからの寒風に吹晒されるので、骨の髄まで氷るかと思はれる。

でも、銚子館の一室に炭火を山盛の獅咬火鉢を枕元に、あの勘兵衛が寝て居る蒲團の、むくくと持上つて居る形を思ひ出すと、凍死して了つても、此方が好いと考へた。

今までに逃出した者は澤山有つた。それが併し一人として巧く逃通した者は無いといふ。つらいのは自分許りでは無いので、誰でも苦しい生活からは、早く離れて見たいのであらうが、全く逃走仕遂げるのは難中の難だ。

といふのは、銚子の土地が袋の底の様な處で、一方は利根川で仕切られて居り、一方は磯から飯岡、續いては九十九里の濱邊に成つて居つて、陸路は利根川に沿つた佐原街道か。山に入つては飯岡道か。大概筋は極つて居て、殆ど一方口の形である。

汽車か汽船に乗つて逃げてても、電報で要所々々に直ぐ網は張られて了ふのである。

以前開新樓の主人は探偵をして居た事もある。のみならず、顔が充分賣れてゐるので、要所々々には乾漢達が眼張つて居るので、直に手配りは出来て了ふ、然ういふ仲であるから、逆も少女一人の智慧では、脱出の方法が無いのである。

それは登女吉澤で知つて居る。逆も尋常の手段では行かぬと知つて居るので、出来るだけ前から研究して、もし逃げる場合には如何して斯うしてと、どの位思案を凝らしたか分らないのだ。

いよいよそれを實行の場合が来た。
計畫通りに重圍が脱しられるだらうか。仕損じた時には、どんな酷い折檻をせられるか分らないのだ。嘘か實か古い頃に、過度の折檻で悶死した少女の死骸を、葛籠に入れて余山の貝塚に埋めたとも傳へられて居る。

此頃では、そんな事は有るまいが、今度こそは海坊主の、唯一口に吸込まれて、身体が溶けて了ふと思へば、どんな事をしても構まつては成らない。地の底を潜つても逃げねば成らぬ。

(四)

線路は二哩にして松岸停車場に達して居る。此所には開新樓の有る處だから別して警戒を要するのだが、深夜の事とて誰一人起きては居なかつた。

登女吉は、それから又線路を猿田の方に向つて走つた。

三門村から船木臺へ掛ると、切通しの山間に入るのので、人家は既う近くには無い。昔は狼が出たといふ處、寂しいのは勿論だが、落行く身には此方が好い。

昔から開新樓の抱へて、娼妓にしる、藝妓にしる、半玉にしる、一人も逃げおぼせた者が無いといふ其中を、自分だけは如何しても潜り抜けて見るといふ登女吉の決心。走りつゞけて来たので寒さ處では無い。汗をさへ掻いて来た。

松岸から三哩三鎮にして猿田驛に着いた。

四時過ぎでもあらうか。

此所の驛の右上に、老樹が眞黒く繁つた森山が有つて、其中に猿田神社といふ古い宮がある。それに先年お参りして知つて居るので、先づ其所に入つて少時休息する事にした。

危い石段を手探り足探りで登つて、それから拜殿に掛つた。

階段などは悉く朽ちて居て、危く踏抜きさう。
 探りく内部に入ると、座板が鳴つて、それに連れて御社全体が鳴動するかど
 も疑はれて、神の御怒りに觸れたかとも恐ろしい。
 いや、神様が果してお在しまして、人の事を見給ふならば、哀れな此身を救ひ給
 ひこそすれ、何んの御咎があるものかと、心を落付けて、用意の櫛寸を摺つて見る
 ど、隅の方に蕪か巻いて立掛けてある、鯨幕が疊んで積上げてある。
 走つて居る間は忘はて居たが、一寸でも停止すると、其寒さと云つたら無い。
 それに舞臺勞れやら、酒の相手の勞れやら、又種々の氣苦勞やら出て、睡氣を催
 さすには居られなく成つた。
 これから山の中に入つて逃げる方針。どの道夜明けを待たなければ成らぬので
 これを幸ひに鯨幕の間に挟まつて、一寝入りした。
 夢には追手に捕まつた處、海坊主に吞まれ様とした處、縮緬の引幕が血で染つた

處、いろ／＼に混亂したのを見つめて居る間に、麓の社家の方で鶏が鳴き出し
 た。
 吃驚して起出て見ると、大分白んで來た。
 此所で登女吉は身支度をする必要を生じた。鑿下地に眉毛無し。長襦袢の扱帯の
 儘では、山の中を走るとしても始末に了へぬ。
 それで先づ内殿の御鏡を借りて、それに我顔を寫しながら、手委せの束髪に直し
 て、それから、御蠟の燃残りの心の取つて、眉毛を引いた。
 包みを解いて中から不斷衣を出して着た。これを着てから寝れば未だ暖か、つた
 のだが、餘りの疲勞にそれを忘れて居たのだ。銘仙の衣物に擬ひ大島の羽織。之が
 銚子女優の不斷の扮装なのである。
 勘兵衛から貰つた百圓は紙に包んで、布呂敷に抱いて、それをシツカリと腹巻の
 様にした。

小出しに五圓紙幣一枚を袂に入れた。
これで既う坂東登女吉では無い。豊岡登女子に復つたのである。

(五)

猿田神社で兎も角も変装した登女子は、それでも益々人目を避ける様にして、山積きを倉橋村に入り、それから見廣村の方へ出ようとした。
山とは土地でこそ呼べ。其實は岡に過ぎないので、其上には廣い原野を有して居る。之が下總地の特色なのだ。
其處に幾條も道は有るが、出来るだけそれを避けて、杉林や桑畑など、そんな間のみ選んで行くので、如何しても思ふ方角へ向き難い。それに餘り地理に明るく無いので、何時しか松山の中に迷ひ込んで、何方へ行つて好いか分らなく成つた。

其代り、人には一個も出會はない。
實は此儘松山に隠れて、餘燼を冷すのも好い位だが、空腹には耐え難い。
金は百圓から持つて居るのだけれど、物を賣る家が無い。いや無い方へとのみ走つて居る。従つて買つて食べ様が無い。扱て斯う成つて見ると、金の難有味が一向に無い。
困りながら登女子は、猶も松の間を潜つて居ると、如何やら、本街道近くへ來たと見れて、古い五輪塔のある處へ出た。
臺石に腰でも掛けて休まふと思つて居る處へ、松の木立の奥からノソノソと出て來た怪物がある。能く見ると男の乞食だ。
「何處へ行きなさんだ。姉さん」と向ふから聲を掛けた。
其乞食の姿と云つたら無い。ベストの臍の様な襦袢衣物を着て、泥染の様な手拭で頬冠をして居る。其破れ穴からハミ出して居る髪の毛の汚れ方なんて、埃に塗れて白

髪どしお思はれない。

髭は伸びて居る。目は爛れて居る。唇はダブトくして居る。這んな者に、口を利く事は無いと考へて、登女子は知らん顔をして行かうとした。

乞食は両手を擴げて松と松との間を扼しながら。

「道は迷つて來なすつたな。然うでなくツちやア用のねえ處だからな」

登女子は己むを得ず。

「何んだツて好いわ。妾は妾の都合で此方へ來たのよ」と言ひつゝ、乞食を避けて行かうとした。

「駄目ですア。其方へ行ツちやア……」と這ひつゝ、又其方へ手を擴げて立閉がつた。

全く惡意の有るのは分つて居る。

這んな者に捕まつては如何も仕方が無い。人家の無い松林。人に救ひを求めると。

りも、自分で活路を得るの他は無いと考へて。

「あら、そんな事して……後から連の男の方が、大勢來るのよ」と登女子は言放つた。

「わッ」と乞食は驚いた。

其間に後の方へ逃げて走らうと考へて、機敏に踵を旋らせると、後の松の蔭にも一人同じ様な乞食が立つて居て。

「なアに、俺、先きから見え隠れに後を尾けて來たア。此娘は一人ぼつちよ。はは、、蛸助、逃がすなツ」と呼ばつた。

「おう、牛兵衛の兄貴か」と前のも呼つた。

間に挟まつた登女子は、左か右かの横に逃げるより他には無い。

飛ぶ様にして五輪塔の後へ廻らうとした。

松の枝が下つて來た様に、後の乞食の牛兵衛といふのが、手を掛けた。

それ許りで登女子は慄然とした。

其の臭氣だけでも耐えられたものでは無い。

「誰か来てッ。助けて下さいッ」と聲の限り叫んだ。

千葉縣下の松林は二里も三里も續いて居る。此處に住む乞食は半分山賊である。何をするか知れたもので無い事を登女子は知つて居る。

(六)

「誰が来るもんかよ。考へて見ねえ、見廣から野尻まで、何處まで行つても松の木ばかりだ。用のねえ山の中に、のそくして居るのは俺達の様な者ばかりだ。聲を聞き附けて来たですれア、此方の手傳ひこそ仕べえ、誰が助けて呉れるもんか。はッはッはッはッはッと牛兵衛乞食は笑ひ出した。

「さア、いくらでも聲を囁らすが好えだ。然うして喉がカラ／＼に引ッ着いたら、清瀧の不動様のお水でも頂かしてやんべえよ」と蝸助乞食も言足した。

此間、登女子は黙つて聽いては居なかつた。聲の限り救ひを求めたけれど、實際此邊に人は居らぬ。

其間に二人から手を荒縄で後に縛られた。それは未だ好いのだが、蝸助が頬冠りをして居た右手拭で、猿轡を箆められたのには、絞殺されるより、以上の苦しみを覺えた。

その臭氣を嗅ぐだけでも氣が遠く成るのである。

這んな乞食に捕まつて、取りかへしの着かの暴行へ加へられる位なら、寧ろ海坊主に吞まれた方が好かつた。這んな不潔な手拭を食まされる程ならば、縮緬の引幕を貰つた方が未だ好かつた。そんな風に登女子は後悔した。

「やア不思議だぞ、此女は……」と蝸助が言ひ出した。

「如何したい」と牛兵衛は問うた。
 「見ねえ、眉毛が書いてあるだア」
 「そんな事はあんめえ」
 「や、これ、見させえ」
 蛸助は指の先に唾を付けて、子供が砂糖でも嘗める様に、引眉毛の上を拭かうとした。

「やア分つた。消すなよ。成程なア」と牛兵衛は覗き込んで顔を見入つた。

「大方これは銚子の女役者だぞ」

「然うだ。開新一座の者だんべね」

「如何して此地へ紛れ込んで来たか」

「それア分つてらア。逃げたんだアな。前にもこんな事が有つたさうだ。俺は知らねえが、上州吉から聞いて居るだ。美しい女でな。それを船木臺で此方の仲間が捕へ

て、其時は人数が多かつたア、九人から男が揃つた居たツて。最も其の中の一人は癪病だつたさうだが、その九人で松山へ引張り込んで、馬の手入場へ縛付けて、散々前で酒盛した上、又元の家へ引渡しに行つて、禮金をウンと貰つたてえ話だア」

「それは面白えね。俺等も然うしやうちやアねえか」

「然うするには、お前と俺と二人の方が、禮金の分前だツて都合が好んでねえか」

「何しろ一番に見附けたのは俺だから、先きへ小屋へ連れて行くぞ」

蛸助が突如脇の下から抱へて引立て様として、つい、袂の中に手を突き入れた。

觸れたのは、五圓紙幣。

指の先の感觸が特別だ。

「やア、變だぞツ」

引出して見て、二人は吃驚した。

「此奴は透し大黒だ。此方等の手に渡るのは、前科者が逃込んで来た時ばかりだア。何んだって斯う巧い破目に廻つたんだらう。なア牛兵衛」

「蟬助、斯うしべえ、酒肴をこしらえてから、それから、ゆつくり仕事に掛らうせ」

「お前が買ひに行くだらうな」

「其後をお前一人では險呑だ。二人で行かう」

「だつて、此の子を一人でも置かれめえ」

「それには好え法が有るだア」

二人の言ふ事を聞いた登女子は、動物よりも劣つた人間だと考へた。豚の様だ。

豚が二頭で腐敗した食物を争ふ様だとも思つた。

其腐敗した食物に比べられる者は、誰でも無い、自分だと思ふと、情け無い處では無い。如何なるものかといふ自暴自棄の心しか起らぬ。

(七)

乞食二人は何事かを密言き合つて、それから身の自由を失つて居る登女子を引つ擔いだ。

先きに立つたのが牛兵衛で、稜々した肩の骨を、登女子の脇の下に當てた。後の

蟬助は、肩を膝の折曲りの處に入れた。

「軽いなア、一人でも好えだが」と牛兵衛は言ひ出した。

「何事も一人で仕ねえ事になア」と蟬助は妙に撥んだ。

それで軽いのを幸ひに駆足で二人は走り出した。

歩調が揃はぬので、擔がれた身は酷く揺られる。其苦しさと云つたら無い。心臓の鼓動が激しく成つて、今にも吐きたい様な氣もして來るが、例の猿轡で無理に口

を押へられて居るので、一層胸が悪く成つて、殆んど耐え切れない。

斯うして松林から櫓の竹林に入つた。

其處を又少時行くと、小高く成つた處に、木から木へと吊を取つて、天幕が張つてある前へ出た。

其處で下された。枯草の上に轉がされた。

天幕には相違ないが、古金巾の引幕や轆などを縫合せたので、雨ならば漏るので済むだらうが、霰か雹でも降つたら、忽ち破れさうだ。

「おい、松ちゃん、居るか」と牛兵衛が聲を掛けた。

「居るよ」と言ひつゝ、出て来たのは、女を食だ。

髪は荒方抜けて、禿の地が赤く成つて見える。顔中腫物が出来て居て、氣味の悪さど云つたら無い。

「松ちゃん、これを一寸見張つて、逃がさねえ様にして居て呉んねえ。其代り酒と

肴をワンと御馳走するだア」と蟾助が懇み込んだ。

「おや、可哀さうに……」と女を食は同情した。

「そんな事云つちやアいけねえ。話はいづれ後でするだア、此方は少しも早く酒肴の用意がしてえだからな」と牛兵衛。

「しつかり頼んだせ。好えかい」と蟾助。

二人は既う夢中だ。

登女子を其所へ轉がし飯にして走り出した。

「おい〜」と松ちゃんを食は呼留めて。

「酒買ひに町へ出るなら、妾には大福でも土産を頼んだよ。それから真も切れてるだからね」と言つた。

聽えたが如何か、二人は何か口走りながら、忽ち林間に妾を消した。

「仕様がねえ奴等だねえ。這んな美しい娘を醜い目に遣はして……」と言ひつゝ、

松ちやんは寄つて来た。

登女子は此場合、首を擡げるより他に仕様が無い。これが救ひを、求める唯一の表現なのだ。

「好いよ〜、口だけは利かして上げるよ」お前を逃がして上げる譯には行かないけれど、二人が歸つて来るまで、猿轡だけは取つてねえ、楽な息を吐かして上げるよ。其代り大聲を立て人を呼んでは厭だよ。なに、手足が縛つて有るんだから、直ぐと又口は押へられるからね」

松ちやんは猿轡を取らうとして、餘りに緊く縛つて有るのに驚いて、爪を痛くしながら漸く解いた。

ホツと息を吐く後から後からと大きな呼吸が波を打つ様に出て来たので、益々苦しかった。

それでも次第にそれが納まつた時に、漸く一口。

「難有ふ……」と禮が言へた。

「まア本統に酷い。猿轡の當つて居た處が、血が留つて居たと見えて、色が變つてるよ」と松ちやんは驚いて居る。

(八)

斯う成つて見ると松ちやんは女である。同情が深い。序に手足の自由をも得さしたい。荒繩が喰込んで嘔痛いだらうと考へて。

「ねえ、お前さん、妾は親切なんだよ。可哀さうだから、手足の方も解いて上げたのだが、逃げやア仕まいね。逃げて妾に迷惑をお掛けちやア有るまいね」と言ひ出した。

「逃げません。縛られて居るものと諦めて、お出さんの親切を無にして駆出す様な

事は決して仕ませんよ。それア如何も痛いんです。痛いのを通り越して、痺れて了つて居るんです」と登女子は顔を皺めた。

「然うだらうねわ。まア本統に……仕様のない。歐達だからぬ。だが、此先が思ひ遣られるよ。悪い奴等に捕まつてねえ、全くお前さんの不運なんだよ」と言ひつ、手足を解いて呉れた。

足の方はそれ程でなかつたが、手の方は荒縄の痕がチャンと溝の様に咬込んで遺つて居る。

「全体お前さんは、何處の人だね」と松ちやんは問掛けた。

隠したつて仕様が無いから、登女子は悉皆身の上を話した。

松ちやんは途中から酷く熱して聴いて居たが。

「あア、それではお前さんは開新一座の女役者なんだね」

「然うです」

「それは如何も他人ぢやア無いねえ。妾も松岸の開新樓で、長い間稼がされて居たんだよ」

「え、えッ」

「妾はねえ、松山と云つて居たんだよ」

「あ、松山といふ人が居たといふ話は、時々聴きました。

「それア聞いて知つてるでせう。悪い病氣が出て、如何にも斯うにも成らなく成つてから、初めて證文を巻かれたのだからね」

「既う死んだ人の様に云つて居ますよ。」

「死んでるのと同じでさアね」と云つて松ちやんは涙含んだ。

悲惨な身の上も有つたものだ。自分も彼處に何時までも居たら、這んなに成つて果てるのだから」と思ふと、登女子は慄然と爲すには居られない。

今に男を食が歸つて來たら、散々二人に苦しめられて、再び又松岸へ連れて行か

れるのだ」

「今、逃げ出せば助かるのだが、それでは又此人の好意にも反くのだからと、静として居るより他に無いのを歎じた。

「お前さん、それで如何いふ風に逃げるつもりで、此邊の山の中へ来たんです」と松ちやんは問掛けた。

「妾は汽車や汽船では逆も駄目だと思ひましたから、猿田の山の中へ逃込んで、それから見廣から清瀧の方へ出て、何處までも山續きに、東條の方から笹川、小見川へでも掛らうかと思つたのです」

「駄目々々、そんな道筋は、皆んな要所々々へ手が廻つてるよ」

「えッ、駄目ですッて？」

「そんな風に逃げた者も、二人三人有つたが、皆んな捕まつて了つてねえ」

「まア然うですかねえ……それを逃げてはイケないでせうか」

「唯ッた一人、昔、巧く逃げた妓が有つたさうだ。但し逃げおほせた話なんて、あの家では聴かせや仕ない。捕まつた話ばかりで脅かして有るんだが……唯ッた一人逃げおほせたといふ、其妓の道筋を、妾は少し事情が有つて知つてるよ」

「ですが、それを聞いた處で、妾、既う仕方が有りませすんわ」

「いや、心配おして無い、妾はお前さんの爲に一肩入れるよ。それもあの家への面當てだアね、妾は既う、どの道長く生きる者ぢやア無いから、後は如何成つても構はないが、せめてお前さんだけでも巧く人間並で暮らさして上げたいよ」

「まア本統に助けて下さいますか」

「巧く逃げられる方法を教へて上げるよ」

「難有ふ御在ます」と思はず登女子は女乞食を拜んだ。

(九)

松岸の遊女の身の果が乞飲である。頭は禿げ、顔は腫れ、二目と見られぬ醜さながら、斯う成つて見ると、後から御光が射して居る觀世音菩薩かとも思はれる。

「此所まで逃げて来たからには、今度は逆さに銚子へ後戻りするんだね」と松ちやんは逆げ方を教へ掛けた。

「えッ後戻りを？」と登女子は意外に驚いた。

「先づねね、山傳ひに、人に見られない様にして、野尻か塚本の方へ出るんだね」

「野尻や塚本なんて、松岸の隣の様なものですわ。そんな方へ行つて好いのですか」

「其所が裏を掻くので、マサカと思ふ方面へ出るのが山なんだよ。それでねえ、裏

路を通つて、利根川端へ出て、いくらも荷船が通るからね、其中の好さ相なのに乗して貰ふのさ」

「船頭衆で妾を知つてる者が有つたら、何んにも成りませんわ」

「其所だよ。知つてる者が有る方が好いので、なに、お前、女と見れア男は甘いよそれを巧く欺かしてね、東京へ入るまでは、十日掛らうが、二十日掛らうが、其間は夫婦にでも成つて居る様な顔を見せて、其實常陸地へ寄つて繋つた時に、ビヨイと飛んで上るのさ。鹿嶋地へ逃げたら既う大丈夫。開新樓の手の達くのは千葉縣だけで、茨城縣へは伸びて居ないんだからね。それから鉢田へ出て、磯へ抜けて、水戸へ出ようとも。土浦へ出ようとも、高濱へ出ようとも、何方へでも行かれるんだよ」

なる程それならば逃げ通せるだらう。好い事を教へられたと登女子は嬉しく。

「難有ふ御在ます。それでは如何か妾を見逃して下さいませ。妾は今教はつた通り

「行つて見ます」

「早く行くが好いよ。お前さん見たいな美しい子を、牛兵衛や蛸助の手に渡してしまふのは、全く惜しくもあるし。お前さんも一生出世が出来ないからね」と松ちやんは言ふ。

「この御恩は忘れませんよ、いづれ妾が如何にか成りましたら、屹と御禮を致しますわ」

「なアに、お前さんが出世する頃には、妾は既う此世に生きては居ないよ。何處の松の根を肥やすか分らないのさ」

何んといふ淋しい言葉だらう、人生の中には斯ういふ悲惨なものもある。一ツ間違へば自分も之に成るのだと思ふと、登女子の牀中が冷切る様に感じられた。

懐中には布呂敷で腹巻にして、九十五圓持つて居るのだから、其内から禮金を置きたいのだが、そんな事をして居る間もない。差當つてはシヨールである。

「これは妾の、ほんのお禮のしるしですから、首へ巻いて、寒く無い様にして下さい」と取つて渡した。

「まア、これは難有ふ。女乞食には結構過るが、折角だから貰つて置きます」と嬉しさに取つて首に巻いたが。

「さア、何しろ、早いが好いね。二人が歸つて来るまでに、少しも早くね」と急立てた。

「では、まア御機嫌能く……」

氣を着けて行きなさいよ」

松ちやん乞食に見送られながら、登女子は走り出した。野尻と思ふ方角へ、一生懸命走つて居る間に、後の方で連りに人の呼ぶ様な聲が聴えて来る。どうも、それが、乞食仲間の様に思はれて成らぬ。斯うなると、どんな無理をしても逃げ通さねば成らぬと決心して、幸ひ松林の

間に乗かであるが、荷馬車を一頭見出したので、それに乗って走らせる事にした。荷馬車の女乗者、馬の背には腹を乗せて馴れても居るが、一ツは腹馬だ。

(10)

始め少しは走つたが、何んとしても荷馬車の事だ。直止まつて道草を食ひ掛る。それを又手綱を引いて急がせる登女子の苦心、これも一通りではなかつた。それに鞍が置いて無いので、居敷の痛さと云つたら無い。紙の鞍に裸馬、八百屋お七か江戸中を引廻された時の苦痛を思ひ出して、昔の人に同情もされて来る。又それに今朝から食事を仕ないのである。走る度に腹に響いて、これも亦耐え難い。

でも幸ひに追手の聲からは遠ざかつたので、後は並足で進ませて、漸く椎柴村に入り、此所で馬を乗替てる事にした。驚いたのは馬の持主だらう、氣の毒な。せめては借馬料にと五圓紙幣を一枚、馬の鬣に結付けて、それから鼻面を元來し道へ向けて放つた。

ばかりく馬は歩き出した。それで安心した登女子は、塚本と野尻との間の、淋しい川端へ出て、枯芦の間に身を潜まして、上り舟のあるのを待つて居ると、二三隻前後して通るのを見た。けれど、然ういふものでは都合が悪い。

選り好みをして居る間も氣が氣で無いが、幸ひに川端へは誰も出て来ないので、その方は先づ好かつた。其所へ漸く唯一隻、大傳馬に澤山炭と油膏とを積んだのが溯つて来た。利根の大河を帆で登るのだから、進行は甚だ遅緩なものだ。

幸ひに船頭の顔には、此方では見覚えが無いので、棧橋の端に立出て。

「船頭さん、其船で便は貰へませんか」と呼んで見た。

「駄目だ」と年を取った髪の白い方が苦い顔をして断つた。

「そんな事言はないで、乗して下さいよ。少し譯が有るんですから……」と登女子は重ねて頼んだ。

「若い女を載せて行くと、運河の税金が高くなるからな」と四十一二の顔の赤い方が申戯を言ひ出した。

「そんな税金が高くなるもんですか、押掬ないで、本統にねえ、乗して行つて下さいよ。神崎か木下で、御神酒位はねえ、騙りますよ」と登女子は説いた。

「や、御神酒を買つて呉れるなら、なア、爺様」と軟化し掛つた。

「わ、女だと思つて、仕様のねえ。だが、酒買ふてえなら乗してやんべわか」と年上の方も傾いて来た。

それより先に船は既う傾いて居る。顔の赤いのが棍を曲げたので、ズーツと岸へ寄つて来た。

棧橋とスレ〜の處で、登女子は船縁の歩みへ飛んで乗つた。

若い方は十二三の小僧船頭を指揮して、弓の様に棹を突張つて、又岸から離れた。

もう之で大丈夫の様な気がして、登女子はガツかりした。然うして艫の揚板の下に入つて、小さく坐つた。此所なら外からは見えないのである。

それと同時に腹の空つたのが益々強く感じられて来た。

突如食物の事を言ふのは甚だ拙いけれど、そんな事を考へては居られない、人間の一番大きな問題は矢張り食ふといふ事かも知れないのだ。

「済みませんが、御飯を食へさして下さいな」と登女子は恥を忍んで頼んだ。髪の白い方は眼をギロリとさして。

「お前は何んだな、逃げて来たんだな」と鬨星を射た。

「えッ……」と登女子は聲の調子を脱した。

「や、親元を逃げ出して東京へ奉公に。とも見えねえ、大方工場から逃げ出した工女だんべえ。如何だ。當つたらう。吞まず食はずで走つて来たんだな。汽船へも乗らず、汽車にも乗らねえで、幾日掛つて本所へ着くか分らねえ船に、便を貰つて乗るなんて、如何だ。然うだらう」と却々鋭い。

でも、工場を逃けたと見られた々が助かると登女子は嬉しく。

「まアそんな事なんです。如何か助けて下さいまし。その代り東京へ着くまでは、どんな用でもしますわ」

(11)

「工場では随分荒ッばい遣ひ方をして、それで食物も碌ッ素ッ法あてがはないさう

だ。それがツラクツて逃出すのは澤山あらう。まア好えわい、何も功德だ。安心してこの船の乗つて行きなさい」と髪白い方は言つて呉れた。

顔の赤い方は大きな飯櫃と、井に澤庵を山盛にしたのと、鯨の赤足の佃煮とを出して。

「マア何んにもねえが、早く、まア掻ッ込みねえ。晩方には何か御馳走をしへえが其代りお前もお酌はして呉れべなア」と笑ひ掛けた。

「それでは済みませんが、食べさせて貰ひますよ」と登女子は、それから食事に掛つた。

鯨の佃煮に澤庵漬、それが、どんなに珍味で有つたらう。極りの悪い程茶碗敷を進めて、漸く正氣に復る事が出来た。

其間に、自然と船の模様も分り、又船頭達の名も知れた。

船は貫十九と云ひ、銚子と東京との間を年中往復して居る荷船である。持主は別

に有つて、佐原の人だ。それを預つて居る船頭の、頭の白いのが佐助。顔の赤いのが半太。小供は長吉と呼ぶのが分つた。

昔は利根川から江戸川を経て、東京に入る荷船は澤山有つた。運送は之に頼るより他には無かつたのだが、川蒸気が出来てから打撃を受けて、半數に減じた。

其所へ持つて来て、銚子と佐原とへ汽車が通じたので、これではいよいよ荷船は全滅だらうと思つて、氣の早い船持は解船の價でドシ／＼賣つて了つた。

處が汽車は出来たが、運賃の率が高いので、荷主の方で算盤が取れぬ。それで矢張川船を歓迎した。

汽車は通じて、土地は開けた。益々荷の出入が續繁に成つて、以前よりも川船の必用が多く成つて、賣つた船持が損をして、買つた者が大層儲けたといふ。そんな奇談がある。

但し、それで儲けた者も、大概松岸の開新樓に注ぎ込んだといふ噂だから、滿更

此船に登女子が縁を持たぬ譯でも無いのだ。

扱て船には乗つたが、其湖江の速力の遅いには驚かれる。全く氣が氣で無い。追手が何時来るか分らぬと思ふと艫の間に静として居られない。積荷の炭俵の間にも隠れたい位に考へて居る。

汽船ですら湖江と成ると、土手の上を歩く按摩の足取と並んで行かれるといふ位だから、それが大傳馬に帆を張つたのでは、思ひ遣られるので、風が落ちたら松岸まで、直ちに後戻りでも仕さうである。

忍瀬古、富川、下森戸、笹本を左に見る頃に日が暮れて、七日月が出た。

川の中の寒さも、艫の間に板戸を締めて、中で炭火をドシ／＼熾すので、非常に暖かである。だが能くこれで窒息して死ぬといふ事を登女子は聴いて居るので、可恐くて成らぬ。

若い船頭夫婦が、息栖の鳥居下に繫つて居て、何時まで立つても起きて来ぬので

他の船の者が艙の間を開けて見たら、既う二人とも死んで居た。然うして未だ鐵竈には、石炭が赫々熾つて居たといふ、それは、つい、此間の様に聽いて居る。

今夜此船に寝ると成ると、四人で此狭い中に横はる譯である。然うして戸を殘らず締めて了つたら、屹と息が止るだらうなど、そんな事も心配して見た。

「押揚に用もあるで、今夜は常陸地方へ繋るべえよ、と佐助は言出した。

「押揚へ着けれア何か肴があんべえ」それまで夕飯は待つたな」と半太は言つた。

夕飯を殊更に延したとて、何んの事は無い。船頭は七遍米飯。つい先きにも蒲鱈で茶漬を極込んだばかり。

常陸路の押揚、其所へ今夜繋るとは、何んといふお説へだらう」と登女子は嬉しさ。これも松ちゃん乞食が教へて呉れたからである。

恐らく今まで逃げ得なんだ人々の、其執念が溜つて居て、自分だけを成功さして呉れるのだらう。然ういふ風にも登女子は考へた。

CHILD

常陸の押揚へ貫十九が着いたのは、七日月が落ち掛つた頃である。

此所で用事と買物とを兼ねて、船頭の佐助は子供の長吉を連れて陸に上つた。後は赤ら顔の半太と登女子とである。

登女子は好い機会が來たと思つた、半太も亦然う思つた。目的は二人異なつてゐる。

登女子は艙の間を出て、炭火に蒸れた熱苦しさを冷し顔に、歩板の方へ行かうとすると、後から半太も這出して來て。

「おい、姉さん、誰も居ねわから、安心して話しが出来るのう」と言出した。

「妾は誰が居たッて安心して居ますわ」と登女子は言つた。

「然うでもあんめえ。船の中でお前の本統の素性を知つてるのは、俺ばかりだぞ」

「えッ」

「佐助は芝居が嫌ひで、相撲好きだが、俺は又反對で芝居好きだア。開新一座の女優者は大概知つてるだア」

「そ、そうですか……」

「おい、何もそんなに白張ッ暮れなくつても好むでねえか。泣かねえ女優者で名を賣つてよ、未だ轍も引幕も貰はねえ、お前は坂東登女子だとは、チャンと俺、睨んでるんだ」

「違ひますよ。妾……そんな人では有りませんよ」

「強情だなア。未だそんな事を言つてるなら、泣かねえ女を泣かして見せるだア。」

「さア先の間の醫油樽を積んだ間へ來さッせえ。半太の腕で拷問して、血の涙を絞らしてやんべえだな。さア來う！」

半太は登女子の手を取つて引立て様とした。

「既う仕方が有りませせんわ。全く妾、登女子なんです。銚子から昨夜逃出して、これから東京へ歸る處なんです」と登女子は已むを得ず實を明かした。

「然うだらう。俺の目は黒いんだから」と半太の鼻息は酷く荒い。

「これには種々譯が有るんですから、如何か見のがして下さいまし」

「それは初めから見のがして居るんだ。だから今まで黙つて居たんだ。なに、心配しなさんな松岸の開新樓へ、お前を引渡す様な野暮はしねえからな」

「難有う御在ます」

「だがよ、俺の方でも話は分つてるがお前の方でも話は分つてるだらうな」

「既うごんな御用でも……」

「どんな用でもちやア納まらねえ。早速お前に頼みてえのは、今夜は四人で艦の間へ寝られねえから、先の間の積荷の間へ窮屈ながら俺だけの寢床を敷かなければ成らねえ。それをお前手傳つてくんねえ」

腕に力を入れて引張つた。

「狭い船縁の事。強て反抗すれば川に落ちなければ成らぬ。已むを得ず、逆らはずに引摺られて、胴の間の邊まで行つた

如何して這んなに男といふ者は、女を困らせる様に出て居るのか。

海坊主の勤兵衛の前にも、どの位厭な奴が附纏つたが分らない。

それを逃れて松山に入れば、あの乞食の二人が亂暴。それをヤツと助かつたと思へば、今又此船頭の無駄。

誰が這んな奴に従ふものか。

隙を見て、取られた手を振切つた。

「え、危ええ！」と半太は言つた。

「あら危い！」と登女子はトボケながら、半太の手を此方へ引張つた。

よろけて此方へ来る處を、片手でトんど力一杯突いた。

足場の悪さに半太は眞逆様。利根川へ落ちて水煙。登女子は飛沫に片身を濡らした。

だが船頭の事だから、それには驚かぬ。

「酷え事仕やアがるッ」と叫びつ、船へ上らうとした。が、生憎水が浅くツて、泥が深い。足音を吸込まれて、モガ／＼して居る間に、登女子は歩板を走つて上陸した。

押揚の町は何處も戸を締めて居て淋しい。

登女子は方角も何も考へず、無茶苦茶に走り出した。

III

常陸國鹿嶋郡宮内村、鹿嶋神宮の境内位神々しい處は——先づ關東方面では他に無い。その奥宮の北の方に御手洗池といふのがある。此所が又幽邃で、確に塵寰を脱して居る。

御手洗池一に涼泉池と稱へ、丘陵に喰込んだ谷地の一部で、四邊に古木が森々と繁茂して居る。方形に石垣で繞らした中に、水晶を溶かした様な清冽の水が湛へられて、其所に樟の老樹が臥龍の如き姿で倒れ掛つて居る。それを支へる様に玉垣が水中にしてある。それが又奇蹟に數えられて居る。涼しさや神代のまゝの水の色、といふ雪才の句碑が立てある。

夏來れば暑さ知らずであるが、今は逆も耐え難い寒さで、後の崖の熊笹の間から

出て居る赤土には、自然に滲み出る水氣が皆氷つて、白菊の花を咲かした様に見える。御手洗池も當然氷るのだが、張る間を許さない程清水が湧き出して、其池尻から

流れ出る水は、忽ちにして小川と成つて瀬切つて居る。此所に来て一人立つ少女。それは豊岡登女子である。

押揚から走り出して、道を神の池の方に迷ひ、それから、砂原、松山、路の無い處を無理に通つて、居切の堀割を國末に出た。

其所で夜が明けた。

それから本道を、木瀧、佐田と過ぎ、宮中に入つて初めて食事をした。

鹿嶋神宮に参詣したが、有名な要石を見るでも無く、奥宮から此方へ折けて、御手洗池に窮まつたのである。

夏ならば茶店もあるのだが、今は掛小屋ばかりで誰も居らぬ。全く登女子唯一人

だ。

登女子は今日まで、これ位神々しく感じたことは無かつた。初めて本當の人間に戻つた様な気がした。

いよいよ、此後を清浄なる生活に入らなければ成らぬ。此所で水垢離でも取つて、身のけがれを洗はうと考へた。

あんな乞食に捕まつた。

あの破手拭で猿轡を箝められた。

手身に觸られた其痕から腐り出しは仕ないかと思ふ程だ。

半太に取られた手の痕も厭だ。

此所で悉皆綺麗な身に成りませうと、思ひ切つて裸体に成つて、標石の上に衣物を投掛け。

「六根清浄」と唱へつゝ、御手洗池に飛込んだ。緑色の水の中に銀の玉が散つた。

雪の塊が浮上つた。

身を切る様な冷めたさ。

御手洗池は意外に浅かつた。如何しても踏み掛けなければ、乳までが隠れない。

水は名代の清冽である。生毛までが水中で数えられる。

それでも誰も見て居ないので、安心して登女子は合掌して、すべての不浄を拂ふ様に祈つた。

斯ういふ時に、つく／＼考へ出されるのは、自分の身の素性。それから両親の事。

嗚呼斯うして自分の身を清めた處で、情無い事には自分の父は、賣國奴として世

間から畜生視されたのである。その自分は娘なのだ。此汚名だけは雪ぎ得られない

のだ。情ない賣國奴の娘!

登女子は、これを思ひ出すと忽ち、御手洗の水が肌に氷附いて、臍まで沁るかに感じられて來た。

得耐えずして、池から飛上つた。

齒の根も合はぬ様に顛へ出して來たので、大急ぎで身体を拭いて、腰巻を締めて長襦袢から先づ着ようとした。

「惜しい。最少し頼む。最少しの間裸体で居て下さい」といふ聲が不意に發した。

(一四)

誰も居ないと思つたればこそ、御手洗池に入つて水垢離を取つたのなれば人が見て居ると知つて居て、誰が裸体になるものか。その油断を何者にか、殘らず窺ひ見れたと、冷切つて居た身体も忽ち熱を持つた。

此所へ、空茶店の破れ葎の蔭から出て來た人。變な帽子の下から長い髪がハミ出して居る。黒のマントに洋服を着て居る。

二十二三の、肥つた顔。髪が滑稽にピンとして居る。

肩から平ツたい箱を提げて、それから手に板張の紙を抱へて居る。

「や、姉さん、吃驚しちやアいかん。僕は畫家だよ。どうも彼方から見て居たが、溜らなく好かつたよ。天女浴泉の圖宛だね。モデル女の中からいくら探したって姉さん程容貌から肉附きまで揃つたのは無いんだよ。まア待つて呉れ給へ。衣物を着るのは待つて呉れ給へ。然うして僕に寫生させて呉れ給へなど」言ひつゝ、自分の持物を投出して、標石の上の衣物類を取上げに掛つた。

「いけませんよ。妾、寒くつて、風邪を引いて了ひますわ」と急いで登女子は取返しに掛つた。

「なる程寒いだらう。それは、つい考へなかつた。併し、それは焚火をして暖まつたら好いだらう僕が枯枝を集めて上げるからね、それで暖を取つて、其勢ひで最う一通入つて呉れないかね。然うすればスケッチして置いて、改めて又交渉する。そ

れが巧く行けば文展へ大傑作が出せるんだ」

「妾は書の爲に水に入つたのでは有りませんの。信心なんですよ」

「それは分つてる。だが、溜らなく好い圖を僕に見せたのが悪いんだよ。水面のピタ／＼に乳房が浸かり掛けて浸からないで居る。それから下は水中に隠れて居たが白いのに縁が掛つて、波紋の動揺した間に落着いた影を見出した處、何んども云へない。何如か僕をして大作を成就せしめ給へ。お前は神様を拜むだらうが、僕はお前を拜む」

「そんな、貴郎、無理を云つて……妾……御覽なさい。這んなに頼へて居るでは有りませんか。さア衣物を渡して下さい」

「ちやア、まア、衣物は渡さう、なに、それを着る間に、焚火を僕が上げて上げるから、まア、兎も角も僕が歡願する事情を、一通り聴いて呉れ給へ拜む」

枯木を畫家が拾ひ集めて居る間に、早く衣物を着て、此所を逃出させようと登女

子は考へたが、手先が凍へて居るのと、胴振ひが止らぬので、思ふ様に着られな

い。折角着て帯を締掛けると、例の紙幣入りの腹巻を締め忘れて居る。又それが爲、遣り直してゐる間に、畫家は既う一抱の枯木を盛つて、それに火を

點けた。燃上つた火を見ては動かれなく成つて、登女子はそれに思はず手を翳した。

「や、僕はねえ、白田照男といふ洋畫家なんだが、世間では既う古いと云つて此の頃甚だ振はないんだ。既に去年の文展にも落選して、大いに面目玉を踏潰して居るので、今度は一つ世間を吃驚させる様な傑作を出すつもりでね、それで英氣を養ひ且つは水郷の空氣及び鹿島神苑の神さびた處を味はひに来て居て、圖らす君の裸休美に接し、今といふ今、インスピレーションを得た譯なんだ、頼む、君。モデルに成つて呉れないか。頼む。頼む。頼む。東京へ若し出し来て呉れる事が出来るなら、非常に幸ひであるが、それが出来なければ、せめて十日でも好い。一週間

でも好い。大船津へ宿を取つて、一日に一二時間此處へ来てね」

「そんな、貴郎、寒い事が出来るもんですか」

「そんな無情な事を云はないで、頼む。拜む。日當は出すよ。モデル料特別に日に三圓拂はう。十日で三十圓だよ。宿賃は無論僕が持つよ。酒が好きなら酒も飲ます。貰が好きなら貰も服ます。甘い物が好きなら、それも買ふよ。草臥れたら僕が按摩をして上げるよ。風呂に入つたら背中を流して上げるよ。外へ出る時には下駄も揃へるよ。頼む。頼む」

(一五)

一日に三圓のモデル料、本統にそれは呉れるのだらうか。それを確かに呉れるとした處で、十日も迂濶と此所に留つては居られない。如何又追手が廻つて来ないと

も限らないからと、登女子は意を決して。

「折角ですが、妾、そんな事して居られませんの。早く家へ歸らなければ成りませんから……」と答へた。

「困るなア。そんな事は云はれては……家へ歸るツて、一体、君の家は何處なんだい」と洋畫家白田は問進んだ。

「家ですか……」と登女子は言つて置いて、急いで其間に考へ様とした。

「え、何處？下總かね。常陸かね。江戸ッ子の様な處もあるがね」

「まア、何處でも好いでは有りませんか」

「や、そんな事を云つたもんで無いは。君、日本の美術の爲だよ。畫道の爲に犠牲に成つて呉れても好いちやアないか。頼む。拜む。姉さん！お前さん！君！頼む。頼む。何も此所で姉さんに對して、猥褻な事を僕が仕向けて居るんちやア無い。頗る神聖なんだ。堂々たる男兒が這んなに頭を下げてるんだよ。え、それで聽いて呉

れないんなら、構ふ事は無い。此所でお前を焼殺して丁ふよ」

「焼殺す？」

「や、それは申慮だよ」

「妾、全く然うして居られない事情があるんですから、如何か勘辨して下さい」

登女子は焚火を離れて此所を去らうとした。

白田は狼狽して、其後から繪道具を引抱へて従ひながら。

「姉さんや、何んとか考へ直して呉れないかい。え、此所でイケなければ東京へ出て来て貰つても好いのだよ。お前の家へ僕の方から押掛けて行つても好いのだよ。姉さんや、頼むよ。拜むよ」

蒼蠅い人だ。執念深い人だ。こんな人に附纏はれたら如何しやうかと思つて、登女子は太息を吐いた。

鎌首を掻げながら追うて来る蛇の様に鋭くは無いが、踵を狙つて附いて来る鷲鳥

並には扱はれると、恐ろしいとか凄いとかいふ感情よりも、唯只何處までも蒼蠅しとして、登女子は足を急がした。

古木の繁る間の、可成り淋しい處を通るのだけれど、さりとて格別手出しはしない。それは流石に乞食や船頭とは異つて居る。其代り口は實に達者なものだ。

「どうも後附きまで好いね。首筋から襟毛の塩梅、肩の肉附きの滑らかな處なんか溜らなく好いね。僕が若し無教育で、道徳や法律を解さなかつたら、無論後から飛掛つて抱着くね。いや、道徳も法律も、解して居ても、僕が最少し新しい男だつたら、肉より他に考へ無いんだから、突如肩の處へ咬付くね。狼だつてね。や、申慮ぢやア無い。美術家の眼に映じたる絶世の美人、唯併し、眉毛がイケないね」

いけない譯だ。引眉毛なんだもの。

登女子は後から何と言はれても振り向いても見ずに急いだ。

畫家は肥つて居る上に、荷があるので、如何しても歩き様が遅い。それを連れま

いと急ぐのみか、のべつに喋り詰めるので、後にはへト／＼に成つて了つた。

それでも到頭神苑を出て、宮中の町から大船津まで追うて来た。

折柄、北浦通の川蒸気が、銚田の方から来たので、突如登女子はそれに乗つた。

畫家も早速それに乗つた。

何處まで附いて来るか分らない。

「妾、何處まで貴郎が附いて入らッしやッても、モデルとやらには成りませんよ」と登女子は宣告した。

「モデルに成らうが、成るまいが、斯う成れば男の意地だ。何處までも附いて行くよ。お前が監獄へ入らない限りは、何處だッて構はない。後から行くね。斯うして二人癡癡病院へ入つたツてね。はッはッはッはッ」

全く困つた畫家ではある。

(一六)

大船津を發した汽船は、浪逆の海から北利根に入り、潮來牛堀と過ぎて、佐原へ出る順序。それでは登女子に取つて危険である。折角常陸地に逃げながら、又下總地に戻るのだから、今までの苦心が何んにも成らぬ勘定。

牛堀で下りて今度は土浦行の汽船に乗替へて、霞ヶ浦を渡るのが一番安全だ。如何しても然うしなければ成らないのである。

それで登女子は牛堀で下りた。

白田も泡を喰つて一緒に下りて。

「おい／＼、何處へ行くね」と問掛けた。

「貴郎、何處へ行くんです」と登女子からも問掛けた。

「僕か？僕はお前の行く方へ行く」

「それでは困りますわ」

「僕も困る」

未だ二時間も待たなければ成らぬので、其所に千歳屋といふ宿屋がある、其家の二階へ乗替客の大概は上つて中食など命じるので、登女子は突とその二階に上つた。

白田も後から續いて上つた。

登女子が通された室に矢張り入つて来た。

登女子は案内して来た女中に向つて。

「此方は別なんですよ」

白田は手を振つて。

「同じだ〜」

女中も間に狭まつて困りながら。

「籠合ひますから、何方にしましても御一緒に願ひます」

仕方が無いので登女子は火鉢を一箇占領して、硝子入りの障子から、川の方を眺めながら、書家に背を向けた。

白田は益々熱して来て。

「ねえ、君、頼む、僕の言ふ事を聴いて呉れたら、何んでも買つて上げるよ。ダイヤ入の金の指環でも、真珠で周囲を裝飾した女持の時計でも、紅寶石の束髪でピンも、お望み次第だよ。僕の希望を満たして呉れなければ、死んで了ふ。いや、死ぬ前にお前を殺すよ」

大きな聲で言ひ掛けたので、隣室の人は吃驚して居る、前後の事情を知らぬ者の耳には、戀愛問題としか思はれぬ。

登女子が困つて居るのを見て、隣室から割込んで来た一人がある。四十二三の女

客だ。引詰めた銀否返し。眉毛無しで、一寸利かぬ氣の顔をして居る。

これが機轉を利かして、知つた者の様な顔をして。

「あら、まア、花ちゃん、お前さんも此處で待合せて居るの」と言ひつゝ、眼顔で其意を覺らした。

「あら、叔母さん！」と女女子も調子を合せた。

「好い處だつたねえ、一緒に歸らうよ」

「どうか然うして下さいな」

「兎角若い女の一人旅はねえ、イケ好かねえ人に馬鹿にされてねえ、困るもんだよ。なに、妾が一緒なら大丈夫だよ」

「本統に安心が出来ますわ」

突然、同伴が現はれたので、白川は一時情氣たけれど、何時までもそれで黙つて居るのでは無い。

「やア君が、此姉さんの知つた人かい。それちやア大いに話し好くなつた。實はモデルの一件でね」と話し掛けた。

「なにがお前さん、そんな顔で女にモデルもんですか」と嚴しいのを一本。

「や、モデルでは無い、モデルだよ」

「何方だつて似た様なもんですよ」

抑も此女は、如何した人だらうか。餘りにハキ／＼して居るので、今度は女の方が恐ろしく成つて來た。

(一七)

其所へ、好い鹽梅に、土浦行の汽船が來たので、突然知つた者らしく名乗つて出た年増女と共に、登女子は大急ぎで乗船した。

洋書家白田も後から續いて乗った。何處まで執念深いのだらうと、登女子は呆れて了つた。

生憎特等室は空いて居るので、何處へ坐つても其傍へ寄つて來られる。それでも成るべく接近させぬ様に、年増女と登女子とは、窓寄りに並んで座を取つた。白田は中央に胡座を組んだ。

年増女は何處までも登女子を「花ちゃん」と呼んで居るが、登女子の方からは年増女を、何と呼んで好いか分らない。已むを得ず「叔母さん」と呼んで、當り觸りの無い話を仕て居つた。

汽船は北利根川を溯り切つて、日本第二の湖水たる霞ヶ浦にと泛んだ。左の方に松原黒く浮嶋が見えて居る。

右手の岸の麻生に停船して、客を積んだが、皆並等客で、此方へは來なかつた。圖々しい白田は登女子を捨て、年増女に話し掛けた。

「ねえ、お嬢さん、君は酷く僕を危険人物だと思つて居る様だが、然うで無いんだよ。全く此の娘の美に打たれたんでね、寫生さして貰ひたいんでね」

「へエ、此娘が貴郎の首を打つたんですか。謝罪しろと仰有るなら、それはさせない事も御在ませんが、其前に貴郎の方から、此娘のお臂でも捻つたのでは有りませんか」と年増女相變らずキビキビして居る。

「いや、決してそんな、そんな事は仕ない。あの御手洗で裸体を見たのが抑もでね」
「ぢやアお前さんは水垢離を取つてる處を覗いて見たんですね」

「まあ然うなんで……」

「妾はお前さんの其時の顔が見たかツたね。出齒龜の生人形を見る様でしたらうね」
「冷かしては困る。僕は熱心なんだ」

「その熱心が可恐いんですよ。此子は妾の近所の娘で……花ちゃんといふのですからね。両親もチャンとして居るんです。土浦でね」

「そんなら僕は其両親に面會して、歎願して見よう」

「逆も嫁には呉れませんよ」

「いや。嫁に貰はんでも、繪にさへ書かして呉れば好いだから」

其間に井上といふのに汽船は寄つた。

其所からは一人の特等船客が有つた。若い立派な紳士。毛皮の襟附の二重外套に

下は和服。寫眞機を携帶して居る。

それと白田は顔を見合せて。

「やア、奇遇ですなア」と聲を掛けた。

「あッ、又お目に掛りましたか」と向ふからも挨拶した。

これでヤツと此方は隙間を得た。

年増女は小さな聲で。

「妾はね、土浦の湖光亭といふ家の主婦なんだがね、お前さんが困つて居るのを見

兼て、まアあんな風に話し掛けたのだが、あの様子だと、何處までお前に附纏ふか

分らないから、船が着いたならば一先づ妾と一緒に家までお出でよ」と囁いた。

「難有う御在ます」と登女子も低聲で答へた。

「一体それで何處へお前さん歸るの？」

「……東京へ……」

「何處からね」

「……押揚の方から……」

「押揚？其所へ奉公にでも行つて居たの」

「まア然うです」

「如何だかね。少し變だね」

デロリ、デロリと顔を見る。

眉毛の引いたのから直にも身元を讀むらしい眼力。

一時を表はれるのは嬉しいが、後が可憐いと愛女子は思はないでも無い。

(一八)

白田照男は愛女子と女將との話を聴きたいのだが、突然此所へ乗つて来た若紳士は、何の事情も知らぬので、白田を好い話相手として。

「ヤ、實に何んですねえ、初めから貴郎とは御縁があるんですね」と語り掛けた。白田は困りながら。

「え……え……」と氣の無い答へ。

「兩國を出る汽車の中が、抑もお目に掛り初めで……それから佐原から牛堀までの船も御一緒でしたねえ」

「え……え……そ、然うでした……」

「貴郎は繪の方。私は寫真……貴郎は鹿嶋方面。私は行方郡。牛堀でおわかれしたのが又此所でお目に掛りました」

「そんな事でしたねえ」

白田の受答はトンチンカンだ。

若紳士は未だ氣が着かず。

「何か好い圖を御見附けに成りましたか」

「え、それが非常の美……え、美景でしたよ」

「御寫生に成りましたか」

「それが巧く行かないんです」

「私は幸ひに好い處を二三枚取りました。一枚は井上の玉清井といふ田の中の森でして、日本武尊が東征の途、お手を御洗ひに成らうとして、玉を水中にお落しに成つたといふ、有名な故跡でしてな」

「そんな處は詰らないですなア」

「如何してマスカ」

「僕は水中に雪の塊が落ちて、其雪の塊の中に梅の蕾が二點。ポツと色を出して居るのを見たんです。それへ緑色が半分纏まつて居るんです。底の砂まで数へられるんです。残らす見えたんです。溜らなかつたです」

「鹿嶋には雪が降りましたか」

「なアに其雪は、花ちゃんといふのです」

「何んだか分りませんが、貴郎の言ふのは……」

「少々分らないかも知れませんが、ノボせて居ますから」

「ちやア土浦から汽車で直とお歸りですか」

「いゝえ」

「筑波山へでもお登りですか」

「多分其所までは行かないでせう」

「それでは何方へ」

「僕には分らないんですが、行く處までは行きますよ」

白田は全く熱し切つて居る。若紳士は餘りに變調子なので、驚いて了つた。

此方で話が切れた時に、登女子と女將どの方でも口を結んだ。

登女子は向きを變へて、若紳士の方を見て吃驚した。

死んだ人が生きて居るのだ。

若紳士の顔は死んだ人に宛如なのだ。

曾て犬吠岬へ病氣の保養に来て居た若い人が有つた。それは東京の金持の息子で

あつた。

で、時々開新座の見物や、銚子館へも遊びに来て、座敷へ登女子を呼んで、種々優しくして呉れた。

不幸の身の上に同僚して泣いても呉れた。
二人の間には、戀と名を附けるには餘りに痛々しい様な、清い／＼交際が成立つて、最一步進んだら、どんな事に成るか分らなかつた時に、其人は血を吐いて死んで了つた。

その死んだ人に宛如のが同船して居る加之それは畫家と知り合なのだ。
併し、他人の空似なので、その人に兄弟は無かつたのだ。

それが克くまア似て居ると、つく／＼見詰めて居ると、向ふでも亦、登女子の方を見詰め掛けて、視線が合つては互ひに横を向く。

(一九)

汽船は却々時間を取る。直航なら早いのだが、霞ヶ浦の兩岸を彼方此方と縫ふ様

に行くので、土浦へ着いたのは夜に入つてゐ有つた。

湖光亭の女將は登女子を急立て、頗る機敏に上陸して、直と俾に飛乗つた。車夫は女將の顔を知つて居るので、行先も問はずに走り出した。男二人は呆氣に取られて居た。

暗い町を川沿ひに走り、橋を渡つて、それから大分行つた處で留まつた。

御料理。湖光亭と云ふ看板が出て居る。夜目で能くは分らぬが、餘り綺麗な家では無いらしい。

「おや、お歸んなさいまし」と出迎へた女中は、一見して怪しい素性といふの知れた。

此家の上つて好いだらうかと、登女子は心配に成つて、俾から降りても門口に立つて居た。

「さア、まアお入りよ。其處では仕様が無いわ」と女將はすゝめ立てた。

「はい……ですが、此上御厄介に成つては濟みません。既う此所まで来れば大丈夫ですから……妾は……」と登女子は逃腰をした。

「何もそんなに可怖がらなくツても好いよ。妾の家に鬼が居る譯でも無いんだから……」と女將は勃然とした様。

「いえ、そんな譯では無いんですが……」

「折角此所まで救つた来たんだから、今又手放して、其後が危なくツては、妾も世話甲斐が無いてえもんだよ。まあ好いからお入りよ」

「それでは御免下さいまし」

仕方なく登女子は仲に入つた。

「まあ何だよ、本統のお前さんの身の上を、つい聴く間が無かつたのだが、それもゆつくり聴かうちやアないか。これから、まあ、お湯に入つて、それから御膳でも食べてね。どうせ今夜は泊つて行くさ。なに、遠慮は入らないよ。口幅ツたい事を

言ふちやア無いが、妾も湖光亭のお廣と云つて、土浦ちやア多少知られて居るんだからね」

「どうも濟みません、何處までもお世話に成りまして……」

しよんぼりと帳場の前に坐つた。

其所へ裏二階の方から、又一人怪しい女中が降りて来て。

「あら、女將さん、お歸んなさいまし」と挨拶して、直と又下座敷の方へ行つて了つた。

何んどなく厭な空氣の満ちて居る家である。登女子は不安で耐えられなく成つた。

女將は何やら連りに留守中の不行届に就て、臺所の者を叱り付けながら、湯殿の方に行つた。

其間に登女子は、餘程表へ逃さうかとも思つたが、それも餘りに酷いと思つて

我慢して居た。

間もなく女將は、顔を光らしながら出て来て、糸絨の絆纏を引掛けながら。

「好いお湯だよ。さア、一風呂飛込んでお出で、草臥がすっかり抜けるからね」とすすめた。

「妾……もう澤山です」と断つた。

「大層遠慮深い子だねえ。躰が温まるから言ふのだよ。其間には御飯の支度が出るからさ。此所で茫然してるより、其方が好いちやないか」

「それでは……」

已むを得ず登女子は湯に入つた。

薄暗い湯殿で、流しの板などは、ヌラ／＼して居て、氣持の悪さと云つたら無い。冷めたくは有つたが、今日の御手洗池。折角清めた躰が、又潰れるかと、情なかつた。

入つて居る。間に、ドカ／＼と客が来た様だ。

裏二階へ上つたと見えて、女中が其方へ急いで行つた。

どうも其客の聲が、白田書伯と、最一人の若紳士の様に思はれる。此所までも執念深く尾けて来たのかと思ふと、根敗がして了ひさうな。

急いで湯から出て、帳場へ行つて見ると、女將は顔を擡めて。

「例のが此所まで来やがったよ」と擡いた。

「如何しませう」と登女子は溜息を洩した。

「好いよ。湖光亭のお廣が附いてるからね、お前さん安心してお出でよ」と長煙管の先で胸を打つて見せた。

真に安心がして居られるだらうか。

C100

其處へ女中が降りて来て。

「あの、今のお客様が、是非女将さんに来て呉れてんです。それで無いと亂暴する
てんですから、一寸顔を出して下さいませんか」と頼み入った。

「仕様が無いねえ、亂暴されては迷惑だから、兎に角、妾行つて来るわ。花ちやん
——、まア花ちやんで通して置かうね。心配しないで待つてお出でよ、なアにお前
いざと成れば、遊んでる人間を幾人でも呼んで、お客だつて何んだつて袋叩きさ
ね」と言ひつゝ、湖光亭の女将は裏二階へ上つて行つた。

代つて女中が帳場に坐り込んで、下らない話を仕掛けたので、登女子は逃出す事
も出来なく成つた。

それに遊んで居る人を直きと呼んで、袋叩きにするなんて、一寸言ふ事でも凄味
がある。狭い土地だけに今夜何處へ逃げたからつて、駄目だらう。折角銚子の方か
ら逃げて来たのに、又同じ様な憂目を見せられては、有らゆる難儀を抜けて此處ま
で来たのが、何んにも成らない譯である、一通の心配では無かつた。

やがて女将は、ニコ／＼して降りて来て。

「車夫の口からね、お前さんの此處へ来た事がバレたんだつて。それに餘計な事を
喋べれアがつて、お前さんは此土地の者で無いなんて。悉皆分つて了つたんだよ。
だが、聽いて見ると、何もお前さんを如何しやうといふのでも無いので、繪の生手
本に欲しいのだから……何んだか妾には分らないが、まア其の位の處なら、お前さ
んも我慢して、一寸彼方へ顔を出して来てお呉れよ」と説き出した。

「えッ顔を出すんですか」と登女子は思はず顔を擧げた。

「妾が附いてるから、何んにもさせやア仕ないよ。なアに、お前さんだつて、満更

素人ぢやア有るまいがね。妾はチャンと初めから睨んでるんだよ」

「あッ……」

「引眉毛ぢやアないか！」

「そ、それは……」

「何、言ひ諱を仕なくツても好いよ。妾だツて苦勞人だアね。餘所から逃出した者を、元の奉公先へ送り還しも仕ないよ」

「ですが……」

「まア、ゆツくり話に聴くとして、今の今といふ問題だよ。其方から形を附けてお呉れで無いか。正直の話だが、今、五圓のお茶代が出たんだよ。此土地でそんな御祝儀は滅多に有りは仕ない。斯う成つて見ると、妾の方も商賣だからね、お客様はお客様として、あつかはなければ成らないやね。顔だけ一寸出してお呉れよ。其代り、厭な思ひは決して妾がさせないから……」

「では女將さん、本統に助けて下さいますね」

「湖光亭のお廣さんだよ。分つてるよ……」

行くならば衣服も着變へるが好い。髪も一寸間に合せに、妾が銀杏返しに結つて上げるからと、女將は急に肩を入れて、強て登女子に其通りにさせて、全く支度の出来た處で。

「まア本統に光るわねえ。此位の美人は土浦にだツて水戸にだツて、無いわ」と女將はホク〜。

す、まの登女子を引張つて、裏二階へと上つて行つた。

白田書伯は若紳士と共に、既う大分酔つて居る處。

「やア、来た〜。大傑作が来た。此人の裸体を見たのは、憚りながら此處では僕許りだ。さア、まア、此方へ……生ける國寶だ。モデルの神様だ。床の間へ坐つて貰ひたい」と立つて手をさへ取らうとした。

「そんなに成さるのなら、妾、厭ですわ」と登女子は直に引下らうとした。

「や、それでは困る。あやまる。頼む、拜む。何しろ、まア、花ちゃんや、仲直りに一杯。さア行かう」と大洋盃を差出した。

女將はそれを遮切つて。

「そんなイデメ方をなさるなら、妾が承知しませんよ」

書伯再び恐縮して。

「それでは一ツ女將に献さう」

(III)

若紳士は一人で心配して居る。書伯に引張られて此處へは来たが、餘りに斯ういふ處へ来るのを好まぬらしいのが、登女子の目には能く見える。

此方では書伯と女將と大洋盃で、献しつ献されつである。

「此家の酒は何んといふ銘だい。鬼切正宗とでも言ふのだらう、却々アルコールが強いぞ」

「それは地の酒ですから、水ッぽくは有りませんよ。此位で無いと、田舎のお客には向きませんからね」

「田舎の客には好いだらうが、東京から来たものには耐らないなア」

「そんな贅澤を言ふもんぢやア有りませんよ。酒の好いのを持つて来るのは譯は有りませんけれど、それでは妾が酔はないから困りますわ」

「何んだ、料理屋の女將が酔へるの酔へないのツて、お客本位で有るべきだが……」

「まアそんなにムキに成つてお怒りなさるなよ。其代り、御誂へ通り、別品を連れ来て来たでは有りませんか」

「サア其別品だ、まア花ちゃんとか云つたの、此方へ向いて貰はう。若い人の方は

かり見て居なくとも好い。此方は芳山章太郎と云つて、阿父さんは有名な實業家なんだ。遊んで居て暮せる結構な御身分なんだが、僕は然うは行かない。大いに繪を書かなければ成らないのだが、扱て、モデルの一件だ」

何處まで蒼蠅のだらう。全く根氣敗かして了ふと、登女子は横を向て取合はぬ。其向いた方が芳山章太郎の正面に當るのである。

「や、そんなに僕を嫌はんでも好い。何も僕がお前を捕まへて、風俗を壊亂させ様といふのでは無い。だのに、お前は逃げて許り居る。後には窮して、知らない此所の女將を叔母さんだなんて、拙い〜。や、大いにお前に忠告を試み度のは、此家は有名な地獄屋で、女將から女中、其墮落の程度は一通りぢやア無いといふせ。其所へだ、お前は甘言を以て連込まれたんだ。女將はお前を助ける様な顔をして、其實お前を喰物に仕ようとするのだ。いや、然うだ、憫むべき花ちゃんよ。お前は飛んだ者に恩を着せられたね。犬を嫌つて狼に咬はれたんだね。馬を嫌つて牛に

乗つた。ホイ、それでは譬へに成らないか。はッはッはッ」

女將は眼の色を變へて。

「好い加減にお仕なさいよ。知らない者は本統だと思ひませア」

「知つてる者は嘘とは思はないや。今に此女將に悪法を書かれて、鬼切正宗に酔つた田舎者に、處女の操を蹂躪されて、忽ち猛烈な病毒を感染して、其髪の毛が抜け顔にブツ〜腫物が出来る。鼻が落ちるね。然う成つてからモデルに遣つて下さいと頼んで來たつて、それは御免蒙るからねえ。其所までに成らない間に、僕に救はれた方が好いだらう。え如何だい。これは正直の話なんだよ」

酔つて居るから溜らない。傍に女將を置いて、白田畫伯は、散々此家を攻撃した。今まで齒齧をして聽いて居た女將は大洋盜に七分目の酒を、殆んど一息に飲み乾して、口の廻りを横撫でにして。

「おい〜、好い加減に爲るが好いよ。客だと思つて、黙つて居れア、好い氣に成

つ、巫山戯た野郎だねえ」と痰火を初出した。

「何んだ、客だと思つて居たのか。此奴は面白い」と白田は受けた。

畫伯對女將の舌戦。

芳山も、登女子も、ハラ／＼して居る。下からは家中の女中が上つて来て立つ。どう成る事だか。

三三三

白田畫伯は、鹿嶋から此所まで折角追込んで来た美人を、地獄屋の女將に深はれたのが不平で成らず、酒に酔つた勢ひで罵倒を續けて。

「何んだい、田舎の達磨茶屋の女將なんて、泥臭くツて食へたもんぢやアない。我慢して此所へ来て、イヤ／＼ながら遊んで遣つて居れア、好い氣に成つて、太平樂

を並べやアがツて、何んだ、其態度なんて、全然或ツちよらん、大方、北海道の土人と出稼の鯨の漁師との間に出来た子が、大きく成るに従つて、段々本州へ上つて来て、やツと土浦まで来て居るんだらう。未だ東京を知らないから、それで鯨の臭氣が取れないんだらう。團体旅行でも好いから、年に一度位は、上野で下りて、電車に乗廻して見るが好いせ」と並べ立てた。

湖光亭の女將は、此時、寒いのも忘れて、突如諸肌を脱いで見せた。

腕には櫻の花。背中には瓢箪鯨の刺青が振つて居る。

「さア、これを見てから文句を言ひねえ。今でこそ土浦くんだりで納まつてるんだが、生れは之で芝ツ子なんだよ。神明で鯨のお廣と云つたら、嶋流しの半鐘より鳴り響いて居たんだが、賭場の争ひでビヤが入つて、水戸へ落ちたのが二十の時さ」と言ひ立に掛つた。

「大分時代から遅れたもんだ。そんな臺詞を言つて嬉しがるのは、未だ五代目が生

きてる頃だ。當節ちやア紀の國屋だつて鼻についでるのに、鯨の刺青を出したつて誰が驚くもんか。膝にヤキが廻つて居るのを、自分から發表するに過ぎないんだ。御覽よ。しなびたバイ〜なんざア悲惨だせ」と白田は猛烈に罵倒の度を高めた。

「お前は女だと思つて、馬鹿にしてるね。好し、此上は、妾の威勢を見せて上げよう」と云ひつゝ、お廣は立つて椽側へ出た。

「これは面白い。拜見しやう。どんな物だか飲みながら此處で見物だ」と白田は大洋蓋を取つた。

お廣は銚子を一本手に持つて、それを裏の方へ投げた。それが變を報じる合圖だと見えて、裏長屋の方から二三人、忽ち走つて來た。頗る機敏に裏二階へ上つて來た。

「どんな奴等かと白田は見た。いづれも三尺、袴纏着の、人相の悪い若い奴等だ。」

芳山は白田の袖を引いて、相手が悪いから退却しろとすゝめた。

白田も少々これには驚いたが、何處までも敗ぬ氣性で。

「なに、此奴等に驚くもんか。僕は柔道は講道館の三段で、相撲は學生時代に美術學校の大關だつたぞ」と景氣を附けた。

「何を云やアがる。さア之から線路へ引摺り出して、貨物列車で轢殺してやるんだ」と一人が言ふ間に、二人は早や兩方から立掛つた。

芳山が其を押し止めて。

「酔つてる者に暴力を用ゐてはイカン。僕が同伴者だから、まア委して呉れッ」十圓紙幣を一枚、破落戸供に遣り、他に又一枚、これは此家の勘定。

「さア白田さん。行きませう」と手を取つて立たした。

これでは誰も手が出されぬ。破落戸連はニコ〜笑ひ出した。

白田も好い潮だと芳山に引立てられながら、二階を降りて行つた。
女將も口の内で、ブツ／＼言ひながら、紙幣を納ひ込んだ。
すべて此有様を見て居た登女子は、これでは逆も這んな家には居られないと、混
雑に紛れて紛出さうとした處を、ドッコイと引留めたのは女將。
「おい、お待ちよ」

(1111)

登女子は胸をドキンとさして。

「一寸……」と間に合せに答へた。

「一寸如何するの」と女將の間方は甚だ荒い。

「一寸下へ……」

「と云つてお前は逃げる氣なんだらう」

「いゝえ……」

「駄目だよ。既う斯う成つたら逃げられないよ。さッお出でッ」

「何處へですか」

「好い處さ」

湖光亭の女將、鯉のお廣は、破落戸三人に目配せした。忽ち三人は立上つた。

縛るまでも無い。一人は口を押へ、二人の手と足を引抱へて擔ぎ上げた。

然うして裏二階を下りて、土藏の中へと連込んだ。

入口の網戸を締めて、男達は直と引取つた。

お廣が一人残つて居る。

此土藏の中は妙な構造で、疊を敷いて座敷の様な形にしてある。それで荷物どて
は何んにも無いのだ。

「ねえお前、古い文句を云ふ様だが、此處は地獄の一丁目なんだよ。皆んな一度は此處へ入れられてねえ、無理往生に取締められるんだよ。なにね、そんなに手数を掛けない子も有るし、お前見たいに面倒なものも有るんだがね、此土藏の中は、まあ酌婦の生巢だね。此處へ娘を入れるのは、生巢で魚を飼つて置く様なもんだアね。お客様の来るまでの持命さ。御談文次第引出して、庖丁を當てるばかりだ」と本音を吹いた。

此處へ、今までに幾人少女が入られたらう。清い少女の運命が、この位此處で滅亡したらうか、數へ切れまい。自分も今、それに成つて居る。今度といふ今度は逃げられない。

鏡子を逃出してから今日まで、後から後からと災難が続いて居る。少女一人が世の中へ飛出すと、斯うも迫害が多いかと思ふと、益々泣いても追付かぬのが覺られて来る。

これは比較的、畫家の難が輕かつた。あの人の言葉に従つてモデルとかに成つて居た方が未だ好かつたかとも考へ出した。

「だがねえ」とお廣はわざとらしい優聲を出して。

「厭だと思へば厭だらうが、面白いと思へば面白いんだよ。何んでも物は氣の持様一ツさ。お前が捌けて出て、巧く働いてさへお呉れなら、衣物も出来ようし、指環も買へようし、どんな贅澤でもねえ、出来るんだよ。家は餘所の様に非道な使ひ方を仕ないんでね、それは皆、樂だと云つて、喜んでるんだよ。まあ今夜ゆつくり此中で考へるが好いさ。今に用事の時には出して上げるよ。寝たけれア蒲團も枕も、そつくり間に合ふ様に置いてあるからね」

一人でお廣は喋つて居たが、不意に土藏を出た。

無論外から錠を下した。

芝居で久松をした事はあるが、此處で土藏の中に押籠られ様とは思はなかつた。

何處まで逆境に陥る身の上だらう。

父親は賣國奴と人から見られて、他國で死んだといふ噂は母親はそれを悲しんで、自殺して死んだのである。

それが自分は非道な母方の親類の手で、八歳の時に銚子へ賣られたので有つた。

それで銚子を逃出して間もなく、土浦で賤しい家業を仕なれば成らぬかと思ふと、此先き又どんな悲しい運命に成るか分らないのだ。

一層此處で首でも縊つて、死んで了はうか。

死ね！死ね！人間は、そんなに面白いものではない。死んだ方が好いといふ様な聲が土藏の何處からとなく聴える様に感じて來た。

無論外面の聲は何んにも聴えぬ。

(二四)

本統に此土藏の中で、首を縊つて死んだ娘もあるだらう。然う思ひ出すと急に何處やらから冷めたい風が吹入つて來る様に登女子は感じて、慄然とせずには居られなかつた。

此時、ゴトン／＼入口の戸が音を立てた。

又女將が來るのか。破落戸が來るのか。それとも厭やらしい客といふのが來るのか。心配で成らぬ。壁際近く小さく縮まつて顔へて居ると、ガラリと網戸を開けて

入來つたのは、六尺も有らうといふ大男。髪は逆立つて居る。鬚は顔中生えて居る。アイヌが熊退治に行つて來たといふ面

附きである。

黒木綿の紋附が垢光りに輝いて居る。胸を高く膨らまして、破袴を長くグラシ無く穿いて居る。

「こらッ」と土蔵が破れる様な大声で呼んだ。

「ほッ」と思はず、登女子は息を吐いた。

「吾輩が今夜、此土蔵の中に泊る。お前と一ツ蒲團を引張り合ふのぢや。イヤそれは嘘ぢやから安心し給へ。實は吾輩、千葉縣の刑事巡査ぢや」

「えッ千葉縣の……」

「お前を追跡して捕縛しろちう命令を受取つて來どるんぢや」

「えッ妾は捕縛？」

「お前は大金を盗んで逃亡したらうが」

それでは海坊主の勘兵衛が、口惜し紛れに、呉れた百圓を盗難として訴へたのかと、忽ち登女子は實青に成つた。

「イヤ、それも嘘ぢや。マア好えから、此處を出るんぢや。何も心配する事は無いわい」と手を取つて引立てた。

何者だか分らない。こんな人に引張り出されては確な事は有るまいけれど、土蔵の中に留まつて居るよりは、幾分か活路が開かれる様に考へられたので、引張られる儘、土蔵を出た。

座敷の方には、前の破落戸も居るのだが、變な顔をして見て居るのみ、手を出し得ない。

それから帳場の方へ行くと、其處には女將も居る。女中も居る。皆不興な顔をして居るのが、別に留め様とも仕ない。

髭の大男は女將をハッタと睨んで。

「今日は早く分つたから、娘も無事に救ひ出されたが、此子を斯うして連れて行くのに、言分は有るまいな」と駄目を押した。

女將は横を向いて、答へも仕ない。

「やア、何んとも文句は云へまい。ヤ云つて貰つた方が吾輩は面白んぢや、此位な家を打壊すのは十分以上は掛らんぞ。こらッ、土浦の大洪水の時に、櫻川の水門を一人で開いたのは、この高星玄海ちう事を忘れやア仕まいな」と又怒鳴つた。でも女將は黙つて居た。

此様子では、土浦に鳴り響いた壯士の親分か。武術の先生か。何かそんな人らしい。

高星玄海に暴れられては、誰も手を附け得ないと見える。

登女子は併し此人に救はれたとて、後の難が如何なるか分らないと思ふと、決して安心は成し得ない。

「さア、娘ッ子、行かうぞ」と入口から出さうにした。

「衣物が此方ですから、妾のと着替へて……」と登女子は注意した。

「そんな事は後で如何にでも成る。安心して来い。さア早いがおえぞ」

矢張手を引いて往來へ出た。

後で初めて湖光亭では人聲が發した。如何なる事か同一息を凝らして居たと見える。

「こら、娘ッ子。如何ぢや。高星玄海の勢方は……あッ、どんなもんぢやい」

えらい御自慢である。威張る中にも無邪氣な處がある。然程に悪い人とも思はれないが、之から何處へ連れて行くのやら、不安の度は少しも減じ無い。

(一五)

暗い町を折曲つて行くと、やがて大通りへ出た。流石に此邊は明るい。

町の中央に小さな川がある。其處の石橋の傍に、角庄といふ旅館がある。其家に

高星玄海は登女子を連れて入つた。

女中は心得て、奥の離座敷の方に案内した。

一間の隣子をガラリと開けて。

「大成功でした」と玄海は言ひつゝ、先きに入つた。

中には芳山も居る。白田も居る。一杯飲みながら待構へて居たといふ様子。

「やア御苦勞でした」と芳山から先づ聲を掛けた。

白田は既うグデン〜。

「や、成功疑ひ無しと思つて、安心して此通り飲んで居る。まア祝盃々々。

「さア、大いに飲ふ。報告はいづれ後にする。さア、娘ツ子、禮として酌をして呉

れツ」と玄海は直ちに胡座。それと同時に還う大洋盞を手にして居る。

若紳士芳山章太郎は、親切に登女子を恤撫はつて。

「まア好かつたですねえ。幸ひ私が此土地で有名な劍術の先生、この高星さんを知

つて居たので、早速救ひ出しに行つて頂いたので……」と事情を明かした。

「飛んだ御心配を掛けまして、相済みませんで御座います。お蔭で危い處を助かりま

して……」と登女子は禮を言つた。

「や、僕の言ふ事さへ聽いて居れば、何もあんな目に遭はなくつても好かつたん

だ。つまり天罰だよ。僕は實際、繪に畫きたいといふ、それより他に野心は無かつ

たんだ。如何だい、あの餘のお廣の悪黨さ加減は。え、お前は何んだなア、眞直に

行けば好い道を嫌つて横町へ反れて、溝へ陥つたと同じなんだなア」と白田畫伯は

管を巻く。

「まア併し、救ひ出せたのだから好いです。白田さん、そんなにお言ひなさんな」

と芳山は宥めた。

「や、それも只では無い。芳山君が運動費をウンと出したからで、なに、高星君の腕力ばかりちやア成功しない。つまり慾張の女將に土産を遣つたからだ」と白田は

説明した。

「そんな事は如何でも好いとして……一体、姉さんは何處の人で、如何したのかね。何處へ行かうとして居るのかね。包まずそれを話して呉れないかね。決して爲に悪い様な事は、我々でしませんから」と何處までも、芳山は優しいのである。

登女子は、白田、高星の二人にだつたら言はなかつたかも知れぬが、優しい芳山が居るので、此人に向つてなら構はないだらうと考へて、銚子の女役者といふ事を打明け、其境遇の苦痛から、悪客の厭な壓迫を恐れて逃亡した事。それから先行先での危かつた事を物語り。扱て逃げて行く東京にも、これと云つて確實な味方は無いといふ事まで打明けた。

「そんな悲惨な境遇だつたか。や、そんな人を執拗く苦しめたのは、僕が悪かつた」と白田は酔も覺めて、謝罪しながら、同情の涙をポロ／＼零す。美術家は如何しても感情的だ。

「あ、氣の毒ぢやのう。そんな不幸な身の上かい。お前位の年頃で、や、餘んまり悲哀過る。背負ひ切れまいよ」と言つては鬼をも挫ぐ高星さへ泣く。

芳山も勿論涙含んで。「社會の裡面には、種々の悲惨事があるが、登女子さんとか、そんな悲しい境遇なのか……」と染々感動した言葉。

三人の男が泣いて呉れたので、登女子は嬉しくもあり、又氣の毒にも成つた。今話した處では無い、未だ自分の身の上には大問題がある。それは父の賣國奴事件である。それを語つたら如何だらうと考へて居ると、自分の涙は出て來ない。只胸の底に血が凝固する様に覺えるのみ。

(二六)

此時白田壽伯は、大名案でも思ひ出したといふ風で。

「やア然うした悲しい身の上の人なら、我々は真底から同情を絞り出して、それを極度に熱しきして、御前に捧げるよ。此分で又ウカ〜と東京へ歸ると、再び危地に陥るに相違ないから、斯うしよう。僕が何處までも保護しやう。僕の家へ當分來て居給へと言出した。

登女子が答へる前に、高星玄海が、大口を開いて笑ひ出して。

「はッはッはッ、そんな危険な事があるもんか。元來事の起りが、白田君が登女子の裸体を見て、執念深く追廻したからで、そんな人の處へは、預けられんわい」と不賛成である。

「それでは君の處へ預からうと云ふのだらう」と白田からも反抗した。

「いや、吾輩は預からん」

「それでは何處へ預ける」

「芳山君の家は、阿父さんが有名な實業家だから、其方へ連れて行つて貰つて、小間遣にでも使つて貰ふのだね」

「なる程それも好い」

これには白田も異存は無い。

登女子とても芳山の家置いて貰へば幸福だと考へた。

芳山は如何したのか、困つたらしい顔をした。然うして。

「まア一ッ登女子さんの考へも聽いて見なくツちやアね……何處へ行くといふ腹案が有るまいもんでも無いでね」と逃げさうにした。

登女子は改めて問はれるまでもなく、自分から進んで出て。

「いゝえ……」と答へた。

「では何處へ行くといふ見込は無いのだね」と芳山は問うた。

「つまり、銚子や土浦の……あんな境遇でなく暮せます處なら、何方へでも参りま
すわ。然うして、どんな事でもして働きますわ。教へてさへ下されば、御飯焚きで
も致しますわ」と答へた。

芳山は漸く決心して。

「それでは僕の家へ、まア来て、それから又好い處があれば、それへ行くさ。實は
僕は、便宜上、阿父と別居して居るのでね……なに、手狭だけれど、登女子さんを
置く位には差支へ無い。其間又本家の方に話しても好いのだから……」と言ひ出
した。

「さアそれで話が極つた。今夜は遅いから、大きいのでグイグイ遣つて、寝るとす
るかな」と白田更に大なる器を求めた。

高星玄海大喜び、盥洗でやらうなどと、古豪傑がる。

登女子は斯う身の落着き處が極つて見ると、眠くつて仕様が無い。

つかれる譯である。

一時過ぎになつて、一同寝に就いた。

豪い躬を白田と高星とで掛合に發して居たが、それですら登女子は快く眠れた。

それで明くる日は寢坊をして、東京へ出發は午後になつた。

衣物も湖光亭のを取返しに遣つた。

名産櫻海老など買込んで芳山と白田とは、登女子を連れて停車場に向つた。

玄海の見送つたのは勿論である。

汽車の中では相變らず白田畫伯が能く喋つた。

それに引替つて芳山は、兎角考へ込の様であつた。

登女子も種々に考へが出て来る。頭の中がガサ／＼音がする様に感じられて來た。

海坊主の勤兵衛の胸毛。山乞食の臭い手拭。松ちやんの顔の腫物。裸馬の居敷の痛さ。利根川の七日月。半太の落ちた水烟。御手洗池の水の冷めたさ。鯨のお廣のしなびた刺青。種々腦中に浮んで来る。

妾は之から東京へ行つて、如何なるのだらう。それも亦強く／＼腦中に根を張つて来る。

だが芳山さんといふ方は、本統に親切な人。この人に絶つて居れば間違ひはあるまいといふ氣も出て、不安の中の安心を得ぬでも無い。

(117)

汽車が上野へ着いたので、芳山は登女子と共に行く筈。白田畫伯はいよく折角掘出しの美人と別れて、單獨で歸らなければならなく迫つた。

未だそれでも氣が残つて居るか。

「いづれ又登女子さん、僕の家にも来て貰ひたい。牛込市ケ谷田町二丁目、白田と云つて尋ねて呉れたら直ぐ分るからね。如何ぞ遊びに来て呉れ給へ。然うすればモデルの神聖な事も分るからね」と登女子にのみ長い挨拶をして、芳山に對しては簡單に失敬の一語。

芳山は登女子を伴つて直自動車に乗って走らした。家は日本橋區濱町である。

家の前が狭いので、自動車は電車通で乗捨てた。

細い露次の様な處に入ると、意氣な妾宅か待合でもある様な家構へ。門の電燈に芳山とある、其處の拭立てた格子戸をガラリと開けて、芳山が先つ入つた。

出迎へたのは、女の二三人。それかどんな人だか能く分らぬ間に、すつと背奥に入つて了つた。

上つて好いか悪いか分らないので、登女子は御影石を敷詰めた上に悄然として立

つて居た。

何んだか想像したより違つた家造りだ。有名な實家業の別邸と云ふのだから、最少し殿しいだらうと思つて居たのにと、そんな事など考へて居た。稍暫時待たされて居た。

外を鈴の音高く鳴らして、夕刊配達が走つて過ぎつゝ、格子戸の間から、二三枚投込んで行つた。

矢張り鈴を鳴らして俥が二三輛過ぎた。

妾を如何して呉れるのだらう。忘れて了つたのではあるまいかまさか……。

漸くにして赤ら顔の女中が出て来た。

「貴女、お上んなさい」と云つて呉れた。

それで恐るゝ上つて見た。

直と其所は八疊の茶の間に成つて、長火鉢が置いてある。

それから先に小さな間が二ツ三ツ有る様で、中二階と思ふ方で、芳山の聲がして居る。女の聲もして居る。

やがて其聲は止んで、足音がした。

此方へ来たのは、高麗屋格子の襦袢に着替へた芳山で、全然人違ひがした様に思はれる。それに續いて来たのは、二十六七の丸髷、瘦せ形のツンとした、但し美人には相違ないのが、襟附の衣服の上に、黒縮緬の羽織を引掛けて居る。

それが長火鉢の前に先づ座を占めた。

「この娘だよ」と芳山は登女子を紹介した。丸髷のは唯小さく合點いたのみ。

「これが私の妻なんだよ」と今度は登女子に向つて紹介した。

「左様ですが……何分宜しく……」と登女子は頭を下げた。それ以上は此人に向つてウカ／＼口を利けぬ様に思はれたからである。

だが、不思議だ。芳山さんよりは餘程年上の様だ。似合はしく無い夫婦だと登女

子は考へた。

「今一寸旦那からね、お前さんの身の上を聴いたければね……どうせ人間は誰だつて悲しい目苦しい目には遭ふものでね。それを一々同情して居た日には、百人二百人居候を置いたつて、兎も追付くのでは無いだけだ、折角旦那が土浦くんだりから、物好きに引張つて居らつしやつたんだから、まア當分家で働いて見ろ。然うして其内に好い口が見付かつたら、お茶屋さんでも待合さんでも住込むが好んだがね、それも却々氣が利かないとねえ、なまじツかの人間ぢやア勤まらないね」と細君は長煙管へ莢を詰め〜。

(二八)

居れば居る程不思議は増して来る。誠に疑問だらけの家庭だと登女子は考へ出し

た。

年上の細君の名はお金さんといふので、却々権力がある。だが、元は如何も藝妓上りの様で、實業家の若主人の妻と成り得る資格は無い様だ。

或はそれが爲に芳山さんは、親の家から勘當でもされて居るのでは有るまいか。然ういふ想像も浮んで来た。

芳山は夜に成ると出て行く。遅く二時頃に歸つて来る事もあり、又泊つて戻らぬ事もある。

留守は細君のお金さんと、女中二人と、それに登女子とで、女ばかり。でも生活は贅澤を極めて居て、朝を除いては大概料理屋から物を取つて、女中達までも残り

が達筆に渡つて居る。お金婦人は、前からの女中には大層優しいのだが、登女子に向つては如何にも慳

登女子は、それが何の故だらうか、初めには分らなかつたが、日数の立つにつれて、これは自分と主人と關係でも有る様に誤解されて居るのでは有るまいかと感附いた。

それで成るべく主人と顔を合さぬ様に避けて居るが、又生憎主人は登女子を遣ひたがつて、中二階の書齋に能く呼ぶ。それが又お金夫人には酷く氣に入らぬ。

夫人は一晚癪を起して倒れてから、引續いて頭が割れる様に痛いどて、病床に入り、出て來ない。醫者を呼びに電話を掛けるやら、氷を買ひに行きやら、大騒ぎ。主人は又珍らしく朝から外出して歸つて來ない。

晩方に成つて、夫人は登女子を病室に呼返んだ。

「何んで御在ます」と登女子は手を附いた。

「何故お前はソんな大聲を出すんです。妾の枕下で故何小さな聲で物を言ひませぬ。妾が大病だといふ事を知らないですか」と突如小言。

「い、え……」と小さな聲で恐る／＼言つた

「此處へ來るのでも、何故足音を忍ばせて來ないんです。妾の頭へ一々響いて、溜りませぬよ」

「何うも濟みませんで御在ました」

「お前は、妾の病氣が重く成つた方が好いのでせう」

「そんな事は御在ませんわ」

「なに無い事が有るものか。妾が死んだ方が好いに相違ありません」

「そんな……そんな事が……」

「お前は妾の死んだ方が好からうし、旦那もその方が好いかも知れないが、妾はそれでは死切れませんからね……」

全然狂人の言ふのと異ならぬので、登女子は黙つて、眠と病人の顔を見て居た。

「妾はねえ、性來ぼんやりに出來て居きすけれどねえ、お前と旦那との約束をした

事なんか、チャンと知つて居ますよ」と意外な事を持出して来た。

「約束?……」と登女子は聞き答めた。

「約束さ……」

「約束ッて……」

「えッ、おトボケで無いよ」

額に載せて居た氷嚢を突然取つて登女子の額に打付けた。

それが右の眉尻に發止と當つた。

氷の角で氷嚢は破れて、颯と水を半面浴びた。引眉毛の片一方は流れて消えた。

登女子は泣きたいよりも腹が立つた。

何しやがるッと呼びたかつたが、喧嘩して、これから出て行く。先きも無いと、

出来ぬ我慢を静として、破れた氷嚢に散つた氷を載せて、無言で此室を出た。

「態ア見やがれ。氷で片ツ方の眉毛が落ちたぢやアないか。片眉毛は間男間女の仕

置に有るんだよ、此癩病女」と口ぎたない罵りが後で盛んである。

(二九)

其夜、主人芳山は歸つて来た。

非常に狼狽して居る様子である。お金夫人の病室に入つて、秘密に何事か語り合つて居たが、それを出ると直ちに金庫を開き、中から何物をか取出し、それから中二階に入つて、手文庫や用筆筒など連りに開いて、大事な物だけを取出して居た様だつたが、それ等を引抱へた儘、又急いで外出した。

お金夫人も病氣どころでは無い。急に起上つて、衣服を着替へ出した。

他の女中を叱り付けて、躰がムク／＼する程着込んで、それから額の裏へ手を遣つて見たり、掛物を脱して見たり、病室の疊を上げて見たり、踏臺を持つて來さし

て天井まで探して、何か知ら一包拵へて、それを引つ抱へた儘で出て行つた。

何んの事やら薩張り分らない。

前から居る女中達二人は、又臺所の方で、二人で孤鼠々々相談し會つて居たが、これも互ひに包を拵へて、逃出しさうにして居る。

耐らなく成つて、登女子は、赤ら顔の方のに向ひ。

「何か事件でも起つたんですか」と問掛けた。

「なに、これは有内の事です。相場をして居らッしやる家ではね、見掛は大層裕福な様でも、却々内輪は苦しいのでね。急に何千圓何萬圓といふお金が入る事が出来て、天手子舞をする事は珍らしく無いんですよ……ですが、今度のは少しおもしろく違ひで、何んでも財産押へを食ひさうなんですッて……ですから、今の内に荷物を轉かすんですとさ」

「へえ、旦那様は相場を成さるんですか」

「然うなんですよ。株式の方では名高い方なんですよ。お若くッてもねえ、それに奥様が又一通りぢやア無いんです……おや、這んな事を言つてる間も心配ですわ。妾達は一寸近所へ荷物をね、預けて來ますからね、なに、奉公人のは大丈夫ださうですが、でも、間違へられては詰りませんわ。其處へ行くとお前さんなんざア、何んにも無いのだから安心ですね。おや、失禮。おほ、おほ、」

泡を食つて二人は出て行つた。

後は登女子一人に成つた。

本統に相場の爲に失敗して、此騒ぎに成つたのであらうか。芳山さんが又平常相場をして居られたのだらうか。考へると疑はしい事だらけので、登女子は變に思つて居た。

其處へ殆ど物音が聴えない様にして勝手口から忍び入つた者がある。

泥棒かと思つて吃驚した。

が、それは書生風に何時しか変装した主人であつた。

「皆んな居ないか」と低聲で芳山は問掛けた。

「はい」と登女子も釣込まれて低聲。

「登女子！お前に話して聞かせる事があるから、一寸……」

「はい……」

「何處も戸を悉皆締めて、錠を下して来い」

「あら、そんな事したら、奥様や、それから女中達が歸つて来るのに……」

「なに、歸つて来るもんか」

「えッ」

「二三十分の間に、總ての解決は下されるんだ、さア宜いから、俺と一緒に、中二階へ来い。俺はお前が氣に掛るんで危ない處を舞戻つたんだ。

「命じられる儘戸締りをした。それを待兼て居た芳山は、常の優しさに似ず、強く

登女子の手を引立て、中二階へと連れて行つた。

登女子は、それを振切る事も出来なかつた。

(1110)

初めて芳山は登女子の顔に氣が附いて。

「其傷は如何したの？」と問掛けた。

「今日奥さんに……氷袋を投付けられました、氷の破片で強く打つたもんですから、痣に……」と登女子は答へた。

「彼奴、ヒステリーだから困る。痛かつたらう。勘忍して呉れ」と言ひつゝ、芳山は立上つて、戸柵からウキスキーの壘を取出し、一口ガツブリ含んだと思ふと、それをフツと登女子の傷痕に吹掛けた。

登女子は吃驚した。

「斯うすれば早く癒るよ」と芳山は言つて、今度は矢張口唇にウキスキを叩つた。登女子は傷がヒリ／＼して、顔全体に熱して来た様に覺えた。

「お話つて、ごんなのですか」と登女子は問ひ掛けた。

芳山は、ホーツと息を長くして。

「實はお前を欺して居たんだ。芳山章太郎だなんて、偽名なんだ」

「えッ……」

「其實は何者だが、それを名乗らなくつても好いだらう。何者だか分ない。成りにこの私といふ者を信用して、何んでも云ふ事をお前は聴くだらうなア……」

「えッ……云ふ事を？」

「今、汽車が出るといふ目の前に、御馳走が並んでるんだ。一ツ掴んで頬張つて行くのが人情だ……其代り、又後に出會ふまでの繋ぎに、千圓ばかり預けて置かう」

「千圓？」

「お前は初めから俺の物ぢやア無いか」

芳山が無理に電氣を消さうとした時に、表を割れる様に打ち出した。

芳山は舌打をして。

「既う来やアがった。チョッ」

其儘裏庭へ飛んで降りた。

取残された登女子は、狼狽して、何をして好いか分らぬ。

外では益々強く戸を叩く。

我知らず登女子は表まで出た。

外では大聲で。

「こらッ、開けんか。こらッ」

登女子は恐る／＼表の戸を開けた。

どか〜と入來つたのは、鬚巡査に、刑事らしい人。外にも未だ二三人居るらしい。

登女子はギョツとした。

「こらッ主人は居らんかッ」と巡査が吐鳴つて居る間に、刑事らしいのは早や家中へ駈上つた。

裏の方へ廻つたのも有つたかして。

「此方から逃げたらしいぞッ」と呼はる聲。

「それッ」と巡査の聲の前後、何が何やら分らなく混亂して、變な人が上を下へ。

登女子は呆氣に取られて、茫然として居た。

巡査は登女子の腕の處を捕へて居て。

「こらッ、此所の主婦は如何したッ」

「先刻出ました……」と登女子は答へた。

「女中は如何したッ」

「これも出ました」

「お前は何んだ」

「……女中……です」

「主人が何處へ行つたか知つてゐるぢやらう」

「いゝえ存じません」

「えッ隠すなら警察へ連れて行つて、嚴重に取調べるぞ」

「でも、全く存じませんの」

其内家宅搜索を終つて、刑事も巡査も一ヶ所に集まつた。

「残念な事をした。一足違ひだつたが、非常線を張つてあるで、其方には掛つたらう。何しろ此女中を、一ツ調べるんだな」と部長らしいのが言出した。

(III)

それから登女子は警官に同行を迫られて警察署へ行つた。
一晩中署長から訊問されて困つた。

全体芳山夫婦が何者で、如何したのか分らない。どうせ善い事をしたのでは有るまい。不正な相場でもして居たのだらうとは思像されるが、それ以上は分らない。向ふからは何も言はずに、唯此方の事のみ調べるので、登女子は甚だ困りながら銚子の事は少しも語らなかつた。

唯土浦から最近に來た女中で、家内の事は何も知らぬとのみ言張つた。明くる朝に成つて、全く事情を知らぬ傭人といふ事が判明したので、歸宅を許された。

が、既う濱町の芳山の家へ歸る勇氣は無い。斯う成ると他に便つて行く處も無いので、矢張り白田畫伯の處へ行く事にした。

牛込の市ヶ谷田町二丁目、畫伯の家は直分つた。

玄關には大なき木彫の面だの、藥屋の古看板などが懸けてあつて、餘程變だ。

頼母を乞うと間もなく出て來たのは、瘦せた、小さな、二十六七の夫人で、頭はハイカラ髪で、眼鏡をさへ掛けてゐる。これが白田さんの奥さんだとすれば、体格に於て甚だ不均等である。

「白田先生はお宅で御座ますか」と登女子は問出した。

忽ち向ふでは覺つたど見えて。

「お前さんですね、銚子の方といふのは……」と問返した。

「左様です」

「能く來て呉れましたね、家ではどんなに待つて居たでせう、さア上りなさい」と

大歓迎である。

登女子は嬉しい気がして、快く上つた。

夫人は改めて挨拶して。

「妾は白田の家内で辨子です。良人のから登女さんの話は残らず聴いて居るので、然ういふのなら是非家へ引取つて、妾の妹ども娘ども思つて世話をしたいと然う言つて居ましたの。い、え、良人のがあゝの通りですから、唯にも信用が無いんです。誤解されるのが道理です。何故あんなに婦人の前には信用がゼロなんですか。妾、口惜しいと思ひます」

滔々として良人を論評し出した。

「實は、芳山さんの處が、妙な事に成りましたので……それで此方へ伺つた譯です……」と登女子は昨夜の事を語らうとした。

「いえ、それは分つて居ます。今朝良人のと新聞を見て、驚いたのです」と夫人

は何彼を知つて居るらしい。

「え、新聞に……」と登女子は問うた。

「委しい事は未だ出ないんです。欄外に一寸出て居るんですが、近年稀有の大賊として、近縣其他を荒し、其稼高が十數萬圓に昇つたといふ奴が、芳山章太郎の偽名で以て、濱町に住んで居たつて……」

「ええッ大賊？」

「其女房が又女泥棒の大姉御で、エレキのお金といふどかね」

「あッ、エレキのお金！」

「昨夜お金だけは捕まつたが、芳山は巧に非常線を潜つたと有ります」

「あッ……夫婦とも大泥棒で御在ましたか」

「登女さんも飛んだ處へ行きましたねえ。實は良夫のも心配して、濱町の芳山の附近を見て来る。登女さんの様子を見て来ると云つて出て行つたのです」

「どうもそれは御親切に……」

それで漸く疑問が晴れたで芳山とお金との關係から、其生活の狀態、大賊といふならば、何も不思議では無かつた。

辨子夫人は更に語り進んで。

「併し、登女さんを家庭の人として許すからには、一通り白田家の家憲も話して置かなければ成りません。又、妾達二人の性格も一通り呑込んで置いて貰はなければ成りません。然うして極めて清淨な生活をしなければ成りませんからね」
御説教でも始まるのかと登女子は思った。

(三三)

辨子夫人は白田の家憲といふのから、夫婦の性格まで打明けて。

「然ういふ譯ですから、登女さんも如何か遠慮しないで下さい。自分の家と思つて居なければ成りません。其代り妾の方でも、思つた事は包まずに云ふ事にしますよ。それで無いと圓滿が永續しますからね」と言渡した。

「どうか貴女からもドン／＼御小言を願ひます。眞面目な家に居た事の無い妾ですから、至らない處が澤山あるだらうと思ひます。其邊は妾も是非直したいと思つて居りますから」と登女子からも言ひ出した。

其所へ、白田畫伯が歸つて来て、喜ぶの喜ばぬのでは無い。福の神が舞込んで来た様な騒ぎである。

「何しろ濱町へ行つて偵察して見ると大變な評判で、明治大正に跨つての大賊だといふ既う其噂ばかり。それに細君も亦女泥棒だつてねえ。いや、世間では女中も皆泥棒だつて言つてるんだ。前から居た二人の他に、近頃来た若い美しいのは、あれで却々大きな働きをしたので、人殺しもしたなんて、見て居た様な事を言ふ奴もあ

る。馬鹿にしてるねえ。それで僕は吃驚して歸つて来たんだ。處が登女子さんは既に家に來て居た。難有い。這んな嬉しい事は無い」とお辭儀を幾回も續けて爲る。登女子は後には可笑くも成つた。

「ヤ、何しろ登女子さんが僕を信頼して家へ來て呉れたんだから、祝盃を擧げに何處かへ行かう。序に東京見物をさせるんだな。これから自動車でも命じて、先づ上野へと遊ばんか。それから淺草へ行つて、ヨカ樓で夕食でもして、帝劇の女優見物にでも行かう。なに、それは後日にするツて。それでも好い。ちやアぶら〜歩いて九段へ行つて、靖國神社へ参拜して、遊就館でも見て、後は電車で四谷の三河屋へでも行つて、牛でも食つて來るか」

二三日の間は斯ういふ調子で、うか〜家内中遊び歩いて暮した。それから大分家内中の心が落着いて來た。それを過ぎると、少々夫人は閉ざ込んで來た。

主人は外へ出勝と成つた。登女子の痣は散つて來た。それから眉毛も大分伸びて來たので、引いても餘り分らぬ様に成つた。

夫人に教へられては、臺所の事など手傳ひ、餘程馴れて來た。二十日ばかりたつ間に、白田家の財産が今窮乏して居るといふ事を知つたので、自分が唯持つて居ても仕方が無いと、彼の百圓の残額を夫人の前に出して、「どうか御預りを願ひます、妾が持つて居ましても、今別に必用も有りませんから……」と言入れた。

夫人の閉いでる顔は急に晴れ渡つた。

「なにね、家の先生の繪さへ賣ればね、千圓内外の金は入るのですが、その買つて下さる方が、一寸御旅行なもんですからね、其間不自由して居たんです。それでは遠慮なく借りますよ。これでどの位助かるでせう。いえ、ね、美術家の内幕といふ

ものは、何處も哀れなもんですよ」と種々他家の例など挙げて言つた。

白田書伯も亦、これを聞いて、大喜び。

「や、實に感謝々々。其代り僕の繪が賣れたら、三越か白木へ同行して、どんな流行な衣物でも買つて上げるよ」

但し其夜書伯は何處へやら行つて泊つた。

夫人はブリ〜怒つて。

「又ブランドンで呑倒れたんでせう。五色の酒も好いが、家内のものは五色の溜息を吐かねば成りません」と大コボシ。

(三三)

登女子が白田書伯の處に居るのが洋書家仲間の問題に成つて來た。

妾だらうといふ説が一番優勢で有つたが、如何してあの細君が一緒に居て、あんなに平和で有る筈が無い。あれは正しく田舎の親類から、修業にでも上京したのでらうといふのに打消されて了つた。

何んにしても美しい。それに肉附が好き相だ。いや形が滅法好い。あれを白田が一人で占領してモデルに遣ふのは怪しからん。我々にも是非寫生させると主張する者が非常に多い。

氣の早いのは結婚を申込んだのもある。

白田は斯う皆んなに着目されたので。油断が出来ない。

洋書家として最も苦心するのはモデルの選擇である。普通モデル屋から廻つて來るのは大概極り切つて居て、どの書家もそれを遣ふのだから、少しも變つた處が取れないのである。

それも少し好いになると、引張り紙齋で、却々廻つて來ない。廻つて來てもモ

「デル料が高くて、其上に我儘を云つて、始末に了へないのだ。それ故、偶、最良のモデルを得た時には、恰度銃獵家が獵地を秘密にする様に、秘し隠して置く。」

白田も實は登女子を隠して置いたのだが、餘りに評判が高くなり過ぎたので、如何する事も出来ぬ。

それに月一回、催す會員の寫生會へ、是非登女子を連れて行かなければならなくなつて、自分だけは承知したもの、登女子が如何だか甚だ覺束無いので、姫君の首を打つて來いと命じられたデン、物の大役を引受けて、家へ歸つて、突如登女子の前へ、頭を下て頼み出した。

「登女子さん、助けて呉れ。お願いだ。」と云ひ掛けた。

「既うお金は持つて居りませんよ」と登女子は答へた。

「いや、今度は金銭上の問題では無いので、極めて容易な事なんだ」

「それは何んですか」

「實は東京で有名な洋畫家連が打揃つて、是非登女子さんにモデルになつて貰ひたいといふので」

「まあ、そんな有名な方達の、大勢の前で、妾が裸体になるんですか」

「イヤ、モデル即ち裸体と思はれては困る。裸体になつて貰へば、夫に越した事は無いのだが、それは又僕が一人で……いえなに、大勢の前で裸体になつて呉れなくつても好いので……なに、畫題が藤娘といふので、例の塗笠で藤の枝を擔いで居る。其形をして居る處を、皆んなに寫生させて貰ひたいので、え、如何かね。僕が皆んなから責められて居て、困つて居るんだから、如何か助けると思つて承諾して貰ひたいので……」

藤娘なら舞臺で踊つた事もある、裸体にならないのなら、一向差支は無いと、登女子は考へて。

「それでは、妾は、承諾致しませう」
「やッそれは有難い。では翌々日、一緒に、我々の倶楽部へ出掛け様。なに、髪結や衣裳附は、チャンと向ふで待つて居るのだからね。なに、畫家といふ者はノンキで、それア面白い。まア行つて御覽。どの位氣晴しになるか分らないでね」と白田畫伯は大喜び。

(三四)

白田畫伯の入つて居る畫會の名前は、ボン倶楽部といふので、赤坂溜池にある。和洋折衷の變な建築で、此處へ集まつて來る連中は、いづれも奇抜な人間ばかりである。常識入る可からずといふ張札さへ出された時代もあつた。
今日は白田が銚子から掘り出して來た美人を、藤娘のモデルにして寫生會を開く

と云ふので、殊に會員の集まりが好い。

登女子は其處へ白田照男に連れられて行つた。

先づ休息室に入つて居ると、其處へ床山が來て、鬘のつもりで地毛を元祿風の鬘に結つた。

それから又衣裳方が來て、黒地の藤の模様を付けて呉れた。

塗笠も冠つた。藤の枝も擔いだ。

「さアこれで好いから、モデル臺へ上つて貰はう」と白田が案内して、廣間の方に入つた。

畫家連は、一樣に喝采した。

舞臺馴ては居ても、斯うして見ると、又度胸の裾處が違ふと見えて、登女子は眞赤になつた。

無遠慮な連中にて。

「よ、帝劇の女優にも此位美しいのは無いぞ」

「新橋にだつて無いよ」

「何處にだつて無いよ」

「強て其比を求めれば、先づ、ほん太の鹿島に引かされる、少し前時分かな」

「あ、既う寫生なんざア如何でも好い」

「願はくば裸体で如何か……」

「騒々しい事夥多しい。」

「中で老人側の一人が。」

「然う騒いぢやアいけない。モデル屋から連れて来たんぢやアないから、いつもの様に冷かしてはいけない。静肅に〜」と制した。

「そんな事は分つてゐるんです。だが、全く如何も優物ですなア」と未だ言ふものもある。

が、老大家の権力は却々あるので、次第々に鎮靜して来た。

モデル臺へ乗つてから、形を附けられて、それで三十分位は動かずに居なければならぬ。芝居を爲るより却つて難かしい。

ぐるりを皆んなで取巻いて、前は前、横は横、後は後といふ風に、思ひ〜に寫生するのである。

未だ騒々しく喋られて居た方が好い位で、斯く水を打つた様に靜かになられては却つて極りが悪いのである。

その卅分の長さど云つたら無かつた。

漸く時が来たので、急いで休憩室に入った。

「や、御苦勞々々。非常に皆喜んで居る。しかし馴れないと三十分間は、つらいだらう。なに、馴れたモデルになると、小唄を唄つたり、話をしたり、口喧嘩をしたりね、却々大變だよ」と白田は話し掛けた。

其處へ入來つたのは、髪も髭も白い老大家で、先き若手連の騒ぐのを制止した人である。

「や、御苦勞々々。實に如何も好い姿勢で……」

白田は登女子に向つて。

「この先生は、有名な大家で、北谷進先生だよ」と紹介した。

登女子は。

「左様で御在ますか……」と云ひつゝ、挨拶した。

北谷老書伯は、つく／＼登女子の顔を見入つて。

「妙な事を問ふ様だが、お前の親御さんは存命かな」と問掛けた。

(三五)

老大家北谷翁が、何の意味で両親の生死を問ふたのか、登女子には分らなかつたが。

「いえ、両親とも御在ませんです」と答へをした。

「ふむ——」と北谷翁は云つた切、其儘考へ込んだ。

何んだか。氣に掛る云ひ方なので、登女子は昵と翁の顔を見詰めた。

翁の方からも亦登女子の顔を見詰めた。

「それで、生れは何處かね。東京だらうね」と再び問うた。

「はい、東京で御在ます」と登女子が答へた處へ、又一人此處へ來た人がある。

若い、のツベリした人で、洋服の上に袴の上張りをして居るのが、ニコ／＼笑ひ

ながら。

「や、僕は、此人を知つて居るです」と突然云ひ出した。
白田はそれを遮切つて。

「君、近間君、君の今出る幕ぢやア無い。北谷先生に何んだかお話がある様なんだから……」

北谷翁は笑ひながら。

「いや、纏まつた話では無いが、或はこの人の親を僕が知つて居るかも知れない。いや、他人の空似かもそれは分らないが……」と云掛けた。
若い近間は打消して。

「私のは、そんなローマンスとは違ふのです、極新しいのです。私は此人を知つて居るんです」

登女子の方では一向覺えが無い。

近間は益々説き進んで。

「此人を私は、此一月の初旬に見たんです。今日モデル臺に乗つたのを寫生しやうと思つて、顔をつくつく見れば見る程、如何しても其人なんです。ついそれ許り考へて居て、私は何んにも寫生しなかつたんです」

白田は急にそれを制して、

「ま、君、分つた。それでは君は銚子方面で見たんだらう」

「勿論さ」

「それなら分つた。や、君が登女さを見たといふのは能く分つた」

「開新座の舞臺で、君、大變な人氣なんで……」

「そんな事を云はなくても好い。分つた。併し此事は、種々事情があるんだから、餘り世間にパツとしては困る。第一、銚子から嚴談でも持込まれると、登女さんは又彼方へ引戻されなければ成らないんだから、なるべく君、秘密にして置いて

呉れ給へ」

「以後は秘密にするか知れないが、既う二三人喋つて了つた」

「如何も仕方が無い。此後を氣を附けて呉れ給へ」

「好し、それは僕の誤解だつたと取消しても好いので……其代り、白田君、今日僕は寫生出來なかつた代りに、君の家へ行くから、ゆつくり寫生さして呉れ給へな」

「それは困る。僕が大事にして居るので……今日モデルに提供するものも、實は苦痛だつたのだが、皆んながヤイ／＼騒ぐので、ヤツと出したので……」

「それは併し、他の者になら、然ういふのも好いだらうが、僕は實に、銚子の開新座で、此人の劇を見て、加之其時スケッチして、それに添へて、聊かながら祝儀を贈つた事もあるんだからね」

然う云はれて見ると、覺えはある。だが、どんな人だつたか。顔などは記憶しうも無い。棧敷裏から行つて、一寸挨拶して、引下るばかりなのだから、唯自分の

舞臺顔のスケッチ丈は忘れない。

登女子は斯う思ひ出した時に、休憩時間が切れたので、再びモデル臺へ乗る事と成つた。

(三六)

今度モデル臺に乗つても、登女子は老大家の言葉が氣に掛つて成らぬので、前程極りを悪く感じなかつた。自分の両親を知つた方に相違なからう。如何かゆつくりお話が見たいものだ、其機會のある事を念じて居た。

それから又最一ツ氣になるのは、若い畫家の近間とやらいふ方。銚子の舞臺を知つて居るといふ事である。まさか彼方へ知らせも仕なからうが、何んだか心配で耐らない。

其人の方をチヨイ／＼見ると、他の人が一生懸命寫生して居るのに構はず、近間の一人、腕を拱いて、此方を見詰めては溜息をして居る。中には寫生しながら。

「何故女優にならないんだらう。此位の美貌を有して居れば、忽ち新しい女優として成功するね。何んしろ今の世の中では、藝も何も無い者の方が女優として成功するので。田舎訛があらうが、キー／＼聲だらうが、そんな事は少しも構はないんだからね。新しい劇壇に打つて出れば、忽ち名高くなつて、松井須磨子位には、直ぐて上げられるよ」と言ふ人もある。

「其の代り忽ち又忘れられて了ふからね」と云ふ人もある。チャカホイの歌を唄ふ人もある。

實に洋書家の連中は、亂暴で、暢氣で、又愉快だと登女子は思った。寫生會が終つてから、晚餐會が開かれた。

狭い食堂へ、ギツシリ話つた。

云ふまでもなく登女子が主賓なのである。其右隣に北谷翁が着席した。

近間などはズツと遠く隔たつて居た。

翁は登女子に向ひ

「いろ／＼貴女に問ひたい事もある。又話したい事もあるが。今日は他に用事があるので、食事後直と私は失敬する。それで、いづれ私の方から白田さんの處へ行くか又貴女の方から白田さんと一緒に來て呉れるか。どちらかにして貰ひたいので……」と云つた。

「是非お伺ひ致します」と登女子は答へた。

其間、卓上演説が續出して、眞摯に、滑稽に、皆登女子の美を賞讃した。

モデル女王といふ名が誰の口にも上つた。

登女子は這んな晴がましいことは無いと考へた。

此寫生會の明くる日、早く、近間が白田家へ訪問して来た。

主人は未だ寝て居るので、辨子夫人が出て應對した。

「まア近間さん、大層早いのでありませんか。何時も這んなにお早いのですか」と夫人は半冷かす様に問掛けた。

「いや、昨夜から寝ないんです」と云ふ近間は、眼を窪ませて居る。

「まア如何なさったのです」

「種々考へて寝られなかつたのです。それに今朝少しも早く此方へ来た方が好いと思つて、大急ぎです、割引電車に初めて乗りました」

「まア何か宅にお話でも有んですか」

「なに穴勝、御主人にのみ限りません。貴女にでも好いのです」

「妾に……」

「未だ誰も今朝お願ひには來ますまいねえ」

「い、え、何方も」

「昨夜は如何でした」

「昨夜つてツ、別に何方も……」

「まア好かつた！」

「一体どんなお話ですよ」

「然う急には話せないんです。まア一寸待つて下さい。これはホンのお土産のしるしなんです」

「何んですねえ近間さん、改まつてお土産だなんて……今まで這んな事をなさらないのに」

「それが爲るのです。まア貴女取つて置いて下さい。で無いと話が仕難いのです。將を射んど欲せば先づ其馬をどか何んどかね」

反物に熨斗を附けて、夫人の膝の先へ突附けた。

(三十一)

「折角ですから、まア頂きは仕ますけれど、何んですか本統に……」と辨子夫人は反物を受取りながら氣味を悪がつて居る。

「奥さん、私は未だ何か差上たいんです。いわ、どんな物でも厭はないんです。生命だけ遺して置いたら、何を差上げて、宜しいんです」と若き畫家の近間は言ひ進んだ。

「まア何んでそんなに貴郎は激して居らッしやるんですか」

「奥さん、端から見たら可笑いでせう。變でせう。理窟に適つて居ないでせう。けれど、私は一生懸命なんです。極めて眞摯な態度で居るんですよ」

「左様ですか」

「此方の登女子さんですね」

「あッ登女子さん！」

「私は結婚が申込みたいんです」

「まア然うでしたか。いづれ、そんな事だらうとも思ひましたが……」

「私は、登女子さんを妻にする事が出来なかつたら、死んで了ひます」

「まア、そんな貴郎、そんな無茶な事を有仰つてはイケませんよ」

「無茶では有りません。私にはチャンと系統が立つて居るんです」

「だつてまア餘りに突然では有りませんか」

「突然は仕方が有りません。マゴ／＼して居ると他の者からも、結婚を申込みに極つて居ます」

「ですが、他の事とは違ひますから、よくまアお考へなすつて……」

「考へてから惚れるのは戀では有りません。奥さん、美術家の狂熱に富むといふ事

は、御存じでせう」

「それは妾も書家の妻ですから、狂熱を全然解さないでも有りませんが……餘りに貴郎、狂熱過ぎますわ」

「其處を買つて貰ひたいんです。俗な事を言ふ様ですが、國には不動産が有りません。又僕が稼ぐ月々の収入も然う少い方では有りません。それで第一、系累が一人も有りません。私は登女子さんが、私を良人に撰ぶのが、最も賢いと思ひます。自己を推選せずには居られません」

「分りました。能く分りました」

「お分りに成りましたら、是非どうか貴女御夫婦で、媒妁に成つて下さい」

「妾には能く分りましたが、主人が何と云ひませうか」

「白田君が之を賛成しない譯が有りません」

「主人が賛成しました處で、肝腎の當人が何と申しませうか……」

「それです。それが心配ですから、是非登女子さんに會はして下さい。私は直接に話しても宜しいんです」

これを次の間で聽いて居た登女子は、恐ろしく成つて、裏口の方へ逃出した。後へ探しに誰やら出た様だったが、居ないので、又引返した様。

「それから餘程長く論じ合つて居た様だったが、其間主人も起出て、書室の方へ連れて行つた様子に、忍び足で登女子は元へ戻つた。

主人は笑ひながら。

「聽いたでせう？」と問うた。

「聴きました」と笑ひながら登女子も答へた。

「如何します」

「如何ツて……」

「あんなに熱心に仰有る方の處へ、嫁に行つたら如何ですか」

「お嫁になんて、未だ……」

「妾も實は未だ、そんな問題は早いと思つて居ましたよ」

「お断りして下さいまし」

「だが、あの様子では、断つたら發狂してすよ。いえ、既う發狂はして居るんでせう。あのイキだと、どんな事に成るか知れませんか」

「あら、そんな脅して下さいますな」

「いえ、脅かしでは有りません。あの方には、確か發狂の血統がお有ですよ」

「まア……」

狂人に惚れられては如何にも成らぬ。

(三八)

それから蒼蠅く近間は來る様に成つた。殆んど毎日の様に來る。時には日に二度も來る。然うして登女子の爲にコートを造つたり、羽織を拵へたり、種んな物を買つて遣つて、其度に又例の結婚問題を持出すので、白田畫伯もホト／＼困り入つて後には逃げて廻る様に成つた。

登女子とても、初めから顔を合せるのを避けて、裏へばかりも逃げて居られぬので、後にはわざと遠くまで買物に出掛けて居た。

自然捕まるのが辨子夫人である。

如何にも斯うにも遣切れなく成つたので、夫人は最後の引導を渡して、登女子に結婚の意志の無い事を發表した。

近間はそれを聞いてから、五六日は来なく成つた。
意外に平和な解決が着いたと喜んで店る處へ、日曜の、極めて天氣の快い日の午
後にぶらりと近間は遣つて来た。

蒼白な顔をして居る。

幸ひ今日は白田も居たので。

「やア近間、如何したね」と問ひ掛けた。

「如何も仕ない……が……今日は改めてお願ひに来たんだよ」と近間は言ひ出し
た。

「何の願ひ？」

「實は既う先日の宣告で、ガツカリして僕は死んだも同然なんだ」

「氣の毒だツたね」

「だが、僕も美術家だよ……あきらめ……といふ事は知つて居る」

「感心！」

「既う止する。戀するのは止すが……其代り一ツのお願ひがある。是非こればかり
は叶へて貰ひたいんだ」

「どういふ願ひ……」

「せめて半日でも好いから、戀人らしく、愉快に遊んで暮したい、彼の人とね」

「理想の實現を半日でも見なれば承知出来ないんだね」

「まア然うなんで……」

「それでは如何いふ事にしたら好いのかね」

「僕と登女子さんと並んで歩いて見たい」

「何處を？」

「何處でも好いんで。つまり夫婦もしくは情人らしく人から見られ、ば満足するん
で……」

「酷く文學的で行くんだね」

「それで既う僕は満足する……それを最後にして思ひ切る」

「でも、目的無しに唯歩く事も出来なからう」

「それは何處でも好い。何方に向つて行つても好いので……」

「では先づ此頃では梅見だな」

「梅見だらうが、梅見すだらうが、それは何處でも構はんです」

「變だね如何も……」

「變でも好いです」

「併し、如何も保護者の地位から見ると、君と唯ッた二人切で出すといふことは困るね」

「そんなに僕を信じないのか」

「僕は信じて世間が信じ無い。其處で僕達夫婦が附いて行つて、邪魔に成らぬ程

度で監督しやう」

「それでは仕方が無い。あはれな僕はそれでも満足しなければ成らないんだ」

餘りに可哀さうに成つたので、白田は辨子に説き、辨子は登女子に説き、大森附

近へ梅見に行く事に決定した。

近間はチャンド三越で買つて来たミュージーシヨールを出して登女子に與へた。

斯うして四人は、市ヶ谷田町を出て、電車で品川へ行き、それから又、京濱電車

で大森へ行つた。

八景園の梅には可成人が出て居る。夫婦連もあれば、家族を大勢連れられたものもあり

また藝妓などと来て居るものもある。

近間は半日の果敢ない戀ごツ子である。思ひのまゝに登女子に寄添ひたいのであ

る。

登女子は又それが厭で〜成らぬ。

近寄れば寄る程避ける様にして居る。
それを白田夫婦は後から氣の毒さうに見て居るのである。
不自然な事が行はれ掛つたのである。
逆も普通の家庭に於て許さるべき事項では無い。
出世間的の畫家の間に於いて初めて見る珍現象である。

(三九)

八景園を逍遙する近間と登女子、それから白田夫婦、誰の眼も梅を見ない。眺望の佳いのも亦見ない。

近間の眼は登女子を少しも離れない。登女子の眼は又それを氣遣つて許り居て、救ひを何時でも求める爲めに、白田夫婦の方にのみ配つて居る。

白田夫婦は又二人の上を監視して、少しも油断を仕ない。
従つて一ツ處を何度も何度も歩き廻りながら、一向それが氣が着かずに居る。
でも然う無意味に歩いてのみ居られぬので、一先づ園を出て、海岸の松淺に行き一酌催した。

酔つて出たのは夕方である。

飲めば飲む程顔の色が蒼くなる近間は、これをお名残に、夕月夜の梅を見ようと
言ひ出したので、再び八景園に入つた。

晝間出盛つて居た人は、既う散つて、梅の下は寂しい。

「これが本統の梅見だね」と白田は近間に向つて言つた。

「梅なんて馬鹿々々しい」と近間は言つて、枝を突如折つた。

「まア近間さん、亂暴ですねえ。無風流では有りませんか」と辨子は串戯ながら叱つた。

「既に人間といふ者が馬鹿々々しいのです。況んや梅なんて、何んでも無い。は、は、」と近間は笑ひながら又梅の枝を折つた。

登女子は益々氣味が悪く成つたので、密と近間の傍を離れて、辨子の後へと廻つて隠れる様にした。

白田は心配して。

「君、酔つたね。外に出たので酔が發したんだらう。さア、其好い心持の處で歸らうぢやア無いか」と言ひつゝ、手を引かうとした。

「何ッ」と叫んで近間は白田の肩を突いた。

白田はよろ／＼とした。

「ヘッポコ繪師、貴様は何んだ、あの柱の三杯を茶漬で食てえ事があるかッ」と怒鳴つた。

「それが酔つてるんだよ」

「馬鹿ッ」

夕月にキラ／＼と閃いた。

外套の下から隠し持つた短刀を抜放つた。

「あッ危いッ」と白田は後から抱いた。

「あれッ」と叫んで辨子は登女子の手を取つて逃出した。

「待てッ、登女子を殺して僕の永久の妻とするんだ。僕は斷じて死なんぞ。繪に死んでも、戀に生きるんだぞッ」

外套をバット脱いで、それを白田の頭から冠せた。白田はそれを取らうとしてモガ／＼して居る間に、近間は疾風の如く走つて、登女子の後を追うた。

登女子は夢中で梅林の中に逃入つた。

枝に袖を引掛けたたり、根に跪いたりして、思ふ様に走れない。

忽ち後から迫着いた近間は、一刀登女子の背に切付けた。

コートが斜に切れた。

再び切付けた時にはパツタリ地上に倒れた。

近間の短刀は梅の曲つた幹に遮ぎられた。

「痛快だねえ。登女子さんは死んだ。せめて其死顔にでも接吻しやう」と言ひつ、梅の花を取つて、近間は唇につけた。

登女子は殺されたつもりで、其所に倒れて居た。

「死人と結婚するのは、實に愉快だ」と近間は言ひつ、梅の古木に抱着いた儘、うツとりとした。

現實と夢現との區別が分らなく成つたらしい。

でも亦、今に梅の枝を折るつもりで、短刀を突立てられるか分らないと思ふと、倒れて居る登女子は、生きて居る氣がしない。

顔へながら密と目を開いて見ると、夕月夜に光る刃の凄さ。

(四〇)

若き畫家近間は發狂したのであつた。

白田夫婦や園内の人々で取押へて、早速腦病院に入れた。経過は甚だ不良の事、登女子は實に命拾ひをした。狂人に殺されたのでは實に情ない譯だ。

其後ボン俱樂部の主催で洋畫の展覽會を上野の五號館で開く事に成つたので、白田も是非出品しなければ成らない。就ては登女子をモデルにして、一番評判を取らうといふ意氣込み。

裸体に成るので無いから、登女子は快く承諾した。

畫題は「梅と女」といふので、梅の老樹と若い娘とを畫くのである。急いだ割には出來が好かつた。

それを展覧會に出した處が、忽ち人氣を集中した。新聞紙上では殊に大評判と成つた。

直ちに賣約済みと成つた。その引取人は渦邊といふ子爵家といふ事である。

「失敗つた。五百圓位に價を附けて置けば好かつた。三百五十圓は謙遜に過たよ」と白田は口惜しがつた。

辨子夫人は又大得意で、殆ど毎日の様に登女子を連れて、展覧會へ出掛けて、然うして良人の書の前に立つのである。

觀覽者は皆、生きた書の登女子の方を見るので、夫人はそれが嬉しくて成らぬ。良人の書と云ふことも一ツの誇りなら、其モデルの美人を連れて來て居るといふ事も亦一ツの誇りなので。

登女子としては、それが又ツラくて成らぬ。書で晒されて居る上に、生身の顔も亦晒さねば成らぬからである。

それ許りでは無い。銚子の人に見られては大變だ。開新樓へ知れては一大事だ。引戻されたら、どんな目に遣はされるか分らないと、其心配で好い加減胸を痛くした。

それに自分を戀して發狂した近間の事も氣に掛る。

又北谷翁が兩親に就て語り掛けられたのも一方ならず氣に掛る。

其後逢ひたいと思つても、先生は急に信州の方へ旅行されたので、如何する事も出来ぬ。

其歸京の一日も早からん事を祈つて居た。

今日も亦夫人に伴はれて、展覧會に行つた。

日曜の事として、人出は却々多い。

殊に評判と成つて居る「梅と女」の前は、押返される程である。却々傍には寄られない。

登女子は何心なく其群集を見ると、中に大きな体の老爺が居る、頭の禿げた。胸毛のある。眼尻の下つた。鼻の大きな。どうもそれが海坊主の勘兵衛の様だ。或は人違ひかも知れない、が、それを正面に見るの勇氣が無い。夫人の袖を引いて。

「大變です」と小聲で言つた。

「えッ、如何して？」と夫人も驚いた。

「譯は後で……早くッ……」と登女子は言ひつゝ、夫人の袖を引いた儘、出口に向つた。

「如何したの？え、如何したの？」と夫人は小聲で問ひを急いだ。

「海坊主！」

「えッ海坊主！そんな書は無いわ」

「いえ、海坊主が居るんです」

「あら、それは、幻影でせうよ」

「まア外へ出て話しますから……」

館外へ出た時には、登女子の顔色は宛然土の様であつた。

(四一)

果して海坊主の勘兵衛で有つたらうか如何か。十中八九までは然うらしかつたが或は又違つて居たかも知れなかつた。

外へ出て見ると、最少し臆を落着けて能く見定めて置くのであつた。あの群集にから、巧に人影を利用したら近寄れぬ事もなかつたらうにと、登女子は聊か氣を取直して来た。

それで、鏡子館の一夜に就て、登女子は委しい話しを辨子夫人に聴かした。

「あッそれは大變です。吃と海坊主でせう。然うで無かつたとしてが、然ういふ事の有つた日は、吉い事は有りますまいから、早く歸りませう」と今度は夫人の方から手を引立て、牛込の家へ急いで歸つた。

既うそれで當分展覽會行は止す事に極めた。

主人も歸つてから、其話を聞いて、これは大いに警戒を要すると言つて居た。

翌日の朝、主人が出掛けた後へ、表の格子戸をガラリと開けて、人が來た。

取次ぎの役目は登女子であるが、昨日から怯えて居るので、先づ密と硝子越しに覗いて見る事にした。

それで好かつた。訪れ來たのは正しく海坊主の勤兵衛であつた。

「御免なせえ」

登女子は無言で奥へ掛込んだ。

狼狽して居るので、唐紙へ突當つて、大きな音を立て、猶更肝を小さくした。

それで既う覺つた辨子夫人は、代つて立出でた。

「何方ですか」

「わ、初めて伺ひますが、此方が白田ちう書先生の御宅で……」と勤兵衛は目をギロ／＼として問掛けた。

「左様ですよ」と夫人は成るべくギス／＼出た。

「わしは、ハア、銚子の者ですが……妙な事を伺ひに來たでね」

「はア然うですか」

「此方の先生の書は、わし昨日、上野で見たが、實に上手いもんだね」

「然うですか」

「あれを、わし、買ふべねと思つたのですが、賣れちやつてるでね」

「賣約済みです」

「既う一枚描いて貰ふ譯には行くまいかね」

「そんな事は出来ませんよ」

「然うかねえ」

「お氣の毒でしたねえ」

良人の書を譽められたので、辨子は悪い心持も仕ない。普通なら、腰でも掛けさして、茶の一杯も出す處だが、然うもして居られない。

だのに勘兵衛の方は悠々と構へ込んで。

「や、わし、昨日、あの場で或人に聴いたのですが、あの書の美人は、本統にあんなのが有るので、モデルとか、モデルとか云つて、チャンと書の人間に、生手本が有るちう事ですが、それ、本統でがすかね」と同出した。

「そ、それは、モデルを遣はない事も有りませんが……宅のは、あれは、繪空事と云つて……生手本無しで書いたんですよ」

「はアてね」

勘兵衛は腰から貰入を取つて、煙管まで出し掛けた。

貰盆を出すは知つて居るが、長く成るのを恐れて、辨子は何處までも氣の附かぬ振をして。

「あの、繪の美人に似た人を、お前さん、知つてゝも居なさんですか」と白張ッ暮て問うて見た。

「や、實はね、わしの娘に宛如だね」

勘兵衛、嘘を吐き居る。

(151)

「それは偶然でせうよ。家の主人は貴郎の娘さんなんて、知つてる譯が有りません」と辨子夫人は笑ひながら言つた。

「や、如何も、わしには然う思はれねえでね」と勘兵衛は服しない。

「でも、何んでせう、貴郎の娘さんは、お宅に居られるんでせう」とわざわざ辨子は問掛けた。

「それが居ないでがす」

「え、居ない？」

「親の大金を持出して、駈落したんでね」

「親の大金？いくら？」

「わ、その、千両ばかりね」

勘兵衛が餘りに嘘を語るのので、辨子は既う可怖く無く成つて、そろ／＼冷かして遣りたい様な氣に成つた。

「へえ、然うですか。では、其千両を持つて東京へ逃げて来て居るといふ形跡でも有るんですか」

「それが如何もね、此方へ来てね、生手本に成つた様に思はれるんでね」

「そんな事は有りませんよ。家のは全く空想で描いたのです」

「それにしても、餘に似て居るでね」

「そんなに疑ぐつて……もし家で貴郎の娘さんをモデルにしたとすれば、それで貴郎は如何しやうといふのですか」

「その娘を連れて、如何したつて銚子へ歸らなくつちやア成りませんや」

「それなら貴郎は、あの書が欲しくつて宅へ入つしやつたのでは無くつて、娘さんの行方が知りたくつていせうねえ」

「ま、ま、然うでがす」

「お氣の毒でしたね。両方とも有りませんで」

「や、それであの子も幸ひで、もし、わしが此所で目附け出したら、そんな事になつたかも知れねえので……」

「手荒な事でもするんですか……」

「髪の毛を攫んで引摺り倒して、殴るだね」

「殴る？自分の娘では有ませんか」

「だから殴るですよ」

「いえ、もし、それが宅での出来事ですと、それは断じてさせませんよ」

「何故ね」

「世間には随分娘で無い者を、娘の様に言つて、誘拐して行くのが無いとも云へませんからね」

「ちやア、わしを本統の親でねえでも思つて居なせえますだね」

「それは如何だか分かりませんよ。妾は世間の話をして居るんですから……」

「うむ……」

勘兵衛は到頭唸り出した。

斯う成ると、箕盆は益々出せない。

従つて勘兵衛は煙管一本を持って餘して再び筒へ入れざるを得ない。

斯うして少時無言の儘で睨み合つて居たが、何時まで居ても仕方が無いのを勘兵衛の方から漸く覺つて。

「や、お邪魔しやした。其代り、もし此後、娘が此方へ来て居るのが知れたらね。

わしも高神の勘兵衛だからね、何するだか分んねえで、これは前以て断つて置きやすぞ」

「本統のお前さんの娘でしたらねえ、何んでもお前さんに爲して置きますよ」と辨子からも言ひ返した。

いま／＼しい顔をして、勘兵衛は、出て行つた。格子戸の締め方なんか、猛烈な音をさした。

辨子は急いで奥に入つて見ると、登女子の姿が見えない。

「既う好いのよ。安心してお出でな。何處に隠れて？」と呼んで見た。そろりと押入の唐紙を開いて。

「既う好うござんすか？」と細いく聲。

(四三)

「好いのですよ。既う安心してお出なさいよ」と辨子夫人は答へた。

「然うですか……では、出ますわ」と答へて登女子は押入の中から這出て来た。

蒲團の中に潜つて居たと見えて、髪は亂れ額端は汗食んで、顔の色は櫻の様にボ
ーッと紅い。

「そんなにして隠れなくつても、大丈夫だつたのに、妾が附いて居ますわ」と辨子は笑ひながら言つた。

「でも、可怖いんですもの」と登女子は訴へる様に言つた。其様が如何にも仇氣なつた。

其處へ主人の白田も歸つて来た。然うして勘兵衛の様子を聴いて、それは如何も油断が出来ぬと、當分外出させぬ事に極めた。

其後如何も白田家の附近を、海坊主がウロウロして居るらしいので、實際危険で成らぬ。

「これは如何にかしななければ成らない。家に置いては、どんな椿事を起すか分らない。と云つて他の畫家の處へ遣つた日には、直モデルに遣つて了はれるから、それも出来ないし」と白田畫伯は考へ込んだ。

「それでは妾の實家へでも當分行つて居て貰ひませうか」と辨子は言出した。

「如何して、お前の實家には、お前の弟を初め若い男が澤山居る。それが又近間の様な問題でも惹起したら大變だからね」と畫伯は非認した。